

八王子市中高年世代アンケート調査からみた「より豊かな高齢社会」

—生きがい・幸せ・地域とのつながりを中心に—

八王子市都市政策研究所 専門研究員 西田 奈保子
主任研究員 福田 純
専任研究員 村上 薫

● はじめに —本稿の目的と位置づけ—

本稿は、八王子市都市政策研究所の平成 22・23 年度研究テーマ『より豊かな高齢社会を目指して～八王子の未来を考える～』の中間報告として、平成 22 年 8 月に行ったアンケート調査『八王子市における中高年世代の生活実態と生活意識に関する調査』の結果を、とくに「生きがい」、「幸せ」、「地域とのつながり」の視点から分析するものである。中高年世代の市民にとっての「生きがい」、「幸せ」、「地域とのつながり」の様相を明らかにし、これらを充実させていくうえで重要となる条件や課題をデータから導き出すことによって、高齢社会における市民の生活と政策形成の基礎となる資料を提供することを試みる。

なお、アンケート調査全体の内容は、中高年世代の市民の生きがいや幸福な老い、人と人とのつながり、就業に対する考え方などの現状把握に焦点を絞ったものである。高齢社会の現実を正面から受け止めることにより、高齢者を含む市民が地域社会でいかに豊かな暮らしをしていくことができるかについて、量的調査を通じて具体的に検討するために、八王子市都市政策研究所自らの企画により実施した。アンケート調査全体の設計、全質問項目の単純集計結果、性別・年齢層・居住地域別のクロス集計結果は、『八王子市における中高年世代の生活実態と生活意識に関する調査報告書』（平成 22 年 12 月）に所収している（注 1）。

平成 22・23 年度の研究全体を通しては、量的社会調査（アンケート調査）と質的社会調査（聞き取り調査）の両面から市民の生活実態と生活意識等を把握、分析したうえで、より豊かな高齢社会の創造に向けた八王子市の政策的アプローチのあり方について最終報告書を取りまとめる予定である。

1. 調査方法

調査対象地域は八王子市内全域である。なお、自然環境や地理的要因、合併などの歴史的要因による地域特性の違いを考慮して、市域を 6 地域に区分して捉えた。この 6 地域は八王子市の基本構想・基本計画『八王子ゆめおりプラン』で用いられている地域区分と同様のものである。

調査対象者は市内在住の 50 歳以上 84 歳以下の男女個人 3,000 人であり、6 地域における調査対象人口比に応じて標本数を配分し、全域で合計 100 地点となるように各地域の地点数を決定したうえで、層化多段無作為抽出を行った。調査方法の概要は図表 0-1 に示した。なお、回収結果は図表 0-2 のとおりで、有効回収率は 70.0%であった。

図表 0-1 調査方法の概要

調査対象	地域	八王子市内全域
	人数	3,000人
	対象	市内在住の50歳以上84歳以下の男女個人 (介護施設等の入所者を除く)
抽出方法	住民基本台帳からの層化多段無作為抽出法	
配布・回収の方法	郵送配布・郵送回収 (自記式)	
調査期間	平成22年8月19日(木)～9月2日(木) (礼状兼督促状発送8月31日) (10月14日回収分まで集計)	

図表 0-2 回収結果

配布数	回収数	うち無効数	有効配布数 (a)	有効回収数 (b)	有効回収率 (b/a)
3,000	2,082	2	2,971	2,080	70.0

・有効配布数は宛先不明の29通を除いた数

・有効回収数には「地域不明」の1票を含む

2. 回答者の特徴

分析に先立って、回答者の特徴について、人口学的特性、家族特性、居住特性、健康状態といった基本的項目に絞って把握しておこう。

まず、回答者の人口学的特性をみると、【男女比】は、男性 43.8%、女性 55.4%である。【年齢層】は、「60～64 歳」が 20.0%でもっとも多く、次いで「65～69 歳」(18.5%)、「55～59 歳」(15.9%)となっている。

次に、回答者の家族特性についてみていこう。【世帯類型】は、「自分たち夫婦と未婚の子ども(または、自分と未婚の子ども)」(35.8%)によって構成される世帯がもっとも多く、次いでほぼ同率で「配偶者とふたり暮らし」(35.0%)が多くなっている。なお、「1人暮らし」の世帯は 11.0%を占めている。「1人暮らし」と「配偶者と2人暮らし」を合計した子どもと同居していない世帯(ただし子どもの有無は区別していない。)の割合は、46.0%である。

【婚姻状態】をみると、配偶者のいる人は 77.5%である。年齢層別に婚姻状態の分布傾向をみると、年齢層が高くなるにつれて「死別」の割合が高まる。「死別」の占める割合は、50～64 歳では 5.1%にとどまるが、65～74 歳では 10.8%、75 歳以上では 31.2%である。なお、女性では、男性よりも配偶者と死別した割合が高い。

【子ども】がいる人は、同居か別居にかかわらず 87.1%に達している。子どもの人数は「2人」(51.8%)がもっとも多く、次いで「3人」(17.3%)、「1人」(15.4%)と続いている。年齢層別に子どもの有無をみると、年齢層が低いほど、子どものいない人が多くなっている。子どものいない人の割合は、65～74 歳では 8.1%、75 歳以上では 5.9%にとどまっているが、50～64 歳では 15.3%となっている。

回答者の居住特性についてみると、まず【居住地域】は、「中央地域」(22.0%)がもっとも多く、次いで「西南部地域」(19.6%)、「西部地域」(19.4%)、「東部地域」(15.6%)、「東南部地域」(14.6%)、「北部地域」(8.7%)となっている。居住地域別にみた有効回収比率は、地域別の 50～84 歳人口比に対応させた調査票配布比とほぼ一致しているため、八王子市内全域の状況を概ね把握していると考えられる。

【現住所居住年数】をみると、「30 年以上」が 35.3%でもっとも多い。これを含め、20 年以

上現住所に居住している人は 54.7%にのぼる。年齢層が高いほど、現住所居住年数が長くなっており、30 年以上居住している人は、50～64 歳では 20.7%であるが、65～74 歳では 45.9%、75～84 歳では 56.0%である。居住地域別にみると、30 年以上居住している人の割合が高いのは、中央地域、西部地域であるが、多摩ニュータウンが立地する東部地域以外では、30 年以上の居住者が占める割合がもっとも高い。なお、東部地域では 10 年以上 15 年未満の占める割合がもっとも高くなっている。

【居住形態】をみると、「持ち家一戸建て」(67.2%)がもっとも多い。「分譲マンション」(14.0%)と合計した持ち家率は、81.2%である。

最後に、中高年の生活の質に大きな影響を与えるといわれている健康状態について、健康度の自己評価である【主観的健康感】を指標にみると、「まあ健康である」(64.9%)と回答した人がもっとも多く、次いで「あまり健康ではない」(14.9%)、「とても健康である」(12.6%)、「健康ではない」(6.7%)となっている。「とても健康である」と「まあ健康である」の合計を主観的健康感が高い群とすると、この群の回答者は 77.5%である。しかし、年齢層別に分布傾向をみると、年齢層が高くなるほど主観的健康感は低くなる傾向がみられる。

無作為抽出による調査対象者のうち、以上の回答者の傾向を踏まえつつ、第 1 章～第 3 章の分析では、これらの特徴をもつ中高年世代による各質問項目への回答をもとに、八王子市に居住する中高年世代全体、すなわち母集団の傾向を統計学的に推測していく(注 2)。第 1 章では生きがい意識と他者とのつながりの関係性について、第 2 章では生きがい特性の構造や生きがい意識と幸せの関係性について、第 3 章では地域社会の現状と高齢期における地域や社会への貢献意欲についてみていくこととする。

第 1 章 生きがいと他者とのつながり

1. 生きがいへのアプローチ

(1) 分析のねらい

誰もが幸せで満ち足りた人生を過ごしたいと願い、それを目指して生活のさまざまな場面で数々の選択を繰り返している。そして幸せな人生を形成するための秘訣を知りたいと思っている。人生の折り返し地点を超えた中高年世代にとっての幸せが健康と経済的安定を基本的な条件としていることは、とくに高齢者を対象とした多数の研究が明らかにしてきており、生活実感としてもこれはまず確かなことであろう。しかし、私たちがどんなに幸福な人生を願い、努力を重ねたとしても、加齢に伴う心身の衰えは誰にも訪れる。また、年齢やその時代の文化によって多かれ少なかれ自らの役割が規定される社会構造において、加齢の過程は、それまで果たしてきた社会的な役割の縮小や離脱の過程でもあり、こうした変化への経済的・心理的適応を求められることも否定できない。

他方で、社会全体が成熟し、個人の価値観が多様化する中で、過去に例をみない長寿社会・高齢社会を迎えた今日、高齢者に対するこれまでのステレオタイプのイメージは変化しつつあり、新たな高齢者像や新たな高齢社会像が求められていることも事実である。

こうした社会の変化に注目するならば、中年期から高齢期の幸福感をめぐる現代の主要な問題のひとつは、いかに満ち足りた高齢期を私たち自らが主体的に創り上げていくかという能動性であり、その能動的な取り組みの契機や継続性を社会的・制度的条件がいかに支えていくこ

とができるかという点にあるのではないだろうか。

以上の問題意識のもと、第1章では、八王子市の中高年世代の生きがいにとって、家族や友人、町会・自治会やボランティアなどの団体活動への参加といった、さまざまな他者とのつながりが果たしている役割を明らかにすることを目的とする。

（２）使用するデータと分析の流れ

中高年世代の生きがいや幸せの現状とそれを支えている条件を明らかにすることによって今後のより豊かな高齢社会を展望するためには、まず、生きがいや幸せを客観的に測定する必要がある。幸福な老いの測定方法に関する研究には一定の蓄積があり、生活満足度やモラール・スケールと呼ばれる「肯定的―否定的感情の連続体」としての心理学的指標が広く用いられてきた。これらの総称として主観的幸福感という訳語が定着している。主観的幸福感の中には、心理的動揺の程度、老いに対する態度、孤独感・不満足感といった次元や、認知的・長期的要素である人生全体についての満足感、認知的・短期的要素である老いについての評価、感情的・短期的要素である心理的安定といった次元が存在することが明らかにされている（注1）。

また、主観的幸福感に影響を与える要因としては、健康度、収入や学歴などの社会経済的地位、配偶者や子どもの有無などの家族構成、これら3つの要因が主に指摘されてきた。家族以外の他者との関係や社会活動と主観的幸福感との関係性については、対象層や関係性の測定指標によって関連性の有無が分かれており、いまだ一貫した知見を得ているとはいえない。この家族以外の他者との関係性については、都市社会の中で家族規模が縮小し、近隣関係が衰退している状況を前提に、選択縁としての友人の役割にとくに注目が集まっているといえる。ただし、これらの指標は、高齢期における生きがいと幸せという2つの概念をとくに区別することなく、主観的幸福感として一体的に複数の項目により測定してきたものである。

ここで本章の主題である生きがいの分析に立ち返るならば、2つの問題が浮上する。一つは、生きがいと主観的幸福感を同一のものとして分析した場合に見逃している現実がないだろうかという問題である。今一つは、高齢者だけではなく中高年を対象とする場合にどのように主観的幸福感を測定すべきか、という問題である。

広辞苑は「生きがい」を「生きるはりあい。生きていてよかったと思えるようなこと。」と定義している。生きがいに関するいくつかの文献によれば、言語学的にみて日常的な日本語としての「生きがい」に相当する言葉は海外にはみられないようであるが、心理学的・社会学的観点からいえば日本に限定せずに生きがいのものを考察できるとしている。そして生きがいは、単に個人の意識における欲求充足として説明しつくされるものではなく、自分の所属する社会の中で禁欲的努力を含む達成感に人生の意味を見出すことであり、「人生には生きる価値があるかのように思わせているもの」、「自らの人生に対する内省から生まれる人生の意味付け」であると説明する。また、より具体的に捉えて、「個人を社会に結び付けているもの」とまとめる定義や、生きがいの構造を「社会的ネットワーク」、「ライフコースの継続性」、「精神性・世界観」の3つの要素から説明しようとするものなどがみられる。さらに、日本人の生きがい意識は、ある人の人生が個人の主観性を超えた道徳的価値基準に照らして積極的に評価されるという意味内容である「集団へのコミットメント」としての生きがいから、自己の持つ価値基準から判断された精神的・心理的充足感という「能力発揮・自己実現」としての生きがいに変化してきたとの視点も示されている（注2）。

以上を踏まえて、本論では「生きがい」を、「個人を社会に結び付けている、現在から将来に向けての不断の取り組みの中に見出されるもの」と捉えるとともに、「生きる喜びや楽しみを感

じること」と捉えることとした。操作的な定義としては、暮らしの中で自分の居場所があるという感覚を持っているといった、自らが認識している社会的役割の程度を生きがい意識と捉えた。また、いかなる生活分野に、どのくらい生きる喜びや楽しみを感じているかという観点から生きがい特性を把握することとした。本章では、前者の生きがい意識を焦点に分析を進める。

生きがい意識を測定する具体的指標は、「生活のなかで、あなたは人から頼りにされていると感じますか」（以下、「人から頼り」）、「生活のなかで、あなたが活躍する場はありますか」（以下、「活躍の場」）の2つの質問項目である。それぞれの項目につき、どのくらい自己の役割を認識しているかを4件法でたずねた。つまり、ここでの生きがい意識とは、肯定的自己を維持する手だてとしての生活上の役割や社会的役割の自己認識の程度であり、この役割が個人と社会との接点を具体的に表しているとの考えに基づいた指標である。

第1章の分析はこれらの指標をもとに次の順で行った。①生きがいに関する八王子市の中老年世代の現状を明らかにするために、生きがい意識の程度について度数分布で把握する。②男女別、年齢層別、健康状態別、他者とのつながりの程度別に、生きがい意識の差異を明らかにする。③これらの個人がもつ特性の中で、生きがい意識を高める要因を特定する。

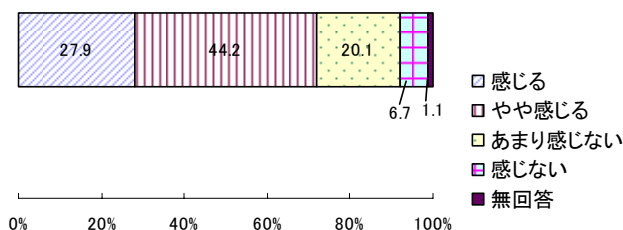
以上の分析を通して、生きがい意識を規定している構造を明らかにすることにより、肯定的な自己を保ちながら、中高年齢期を生きるための示唆を導き出すことにしたい。

（3）中高年世代の生きがいの現状

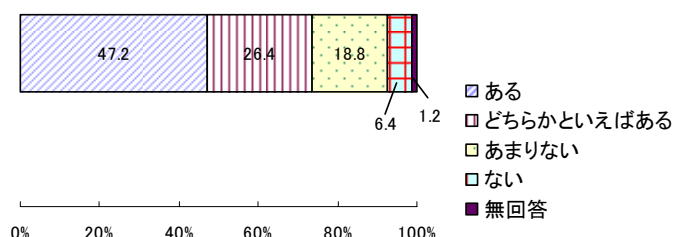
自らの社会的役割について肯定的に捉えている中高年世代が多数を占めている。

まず、上述した質問項目に対する回答について、度数分布の傾向を図表1-1、1-2に示した。生きがい意識のうち、人から頼りにされていると感じるかについては、「やや感じる」（44.2%）、「感じる」（27.9%）が多くなっており、7割強が肯定的な回答をしている。活躍する場があるかについては、「ある」（47.2%）、「どちらかといえばある」（26.4%）が多くなっており、7割台半ば近くが肯定的な回答をしている。どちらの質問についても、肯定的な回答が多数を占めていることがわかる。

図表1-1 人から頼り (n=2,080)



図表1-2 活躍の場 (n=2,080)



以上から、生きがい意識がもっている集合的な傾向の概略を捉えることができた。生きがい意識が高い傾向にある人が多いことはもちろん望ましいことであり、この現状を把握できたことには一定の意味があろう。しかし、生きがい意識について考察する場合、その高低の散らばり具合だけが問題となるわけではない。生きがい意識が「どのように」ばらついているかということ把握することも重要である。

もう一度、個々人のレベルに立ち返ってデータを見渡せば、生きがいを感じている人もいれば感じていない人もいる。どのような人がどのような理由で、生きがいの高低を判断している

のか。例えば、男女別、年齢層別など人口学的属性によっても生きがい意識は異なるかもしれない。暮らし向きにゆとりがあるかどうか、職についているかどうかといった社会経済的属性や、健康状態によっても異なるかもしれない。1人暮らしか、配偶者がいるか、子どもと同居しているかといった家族構成によっても異なるかもしれない。さらに、親族や近隣、友人と築いている親しさや支援関係などの個人的ネットワーク、趣味や地域の団体活動に参加しているかといった社会的ネットワークなど、他者とのつながりの程度によっても、生きがい意識が異なるかもしれない。つまり生きがい意識の分布は、人口学的属性、社会経済的属性、家族構成、他者とのつながりなどさまざまな要因によって規定されている可能性があり、こうした要因がからまりあって、全体としての生きがい意識の分布が決まっている。したがって、生きがい意識のありようを把握しようとするときには、度数分布だけではなく、生きがい意識がいかなる要因によって決まっているかを問わなければならない。そこで、ここからは生きがい意識を規定する構造を明らかにしていくことにしたい。

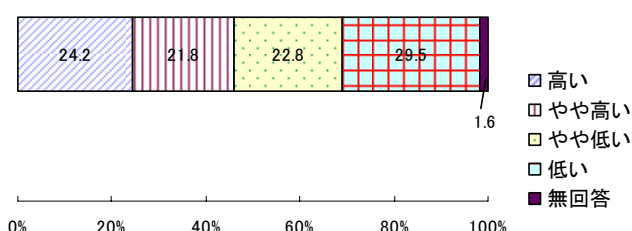
2. 生きがい意識の基本属性

(1) 生きがい意識の測定方法

生きがい意識の高低を表す合成変数を作成し、今後の分析に使用する。

生きがい意識をわかりやすくまとめて説明するために、「人から頼り」と「活躍の場」の2つの質問項目に対する回答を組み合わせると一つの尺度とすることによって、生きがい意識の高低を1～4点までの得点で説明し、得点が高いほど生きがい意識が高いと捉えることとした（注3）。なお、生きがい意識の新変数（以下、「生きがい意識」）の度数分布は図表1-3のとおりである。生きがい意識得点の分布状況はやや低い方に偏っており、この点は平均に関して論じるときに注意しなくてはならないが、全体の平均値は2.41点であった。この平均点は、「人から頼り」及び「活躍の場」について「思わない」1点～「そう思う」4点とした場合の平均点に比べると低くなっているが（「人から頼り」2.94点、「活躍の場」3.16点）、これは続く分析のために度数分布の偏りを調整したためである。

図表1-3 生きがい意識の度数分布 (n=2,080)



(2) 人口学的・社会経済的属性と生きがい意識

女性は男性より、年齢層の低い人は高い人より生きがい意識が高い。また、暮らし向きにゆとりがある人、就業者、高学歴の人は、そうでない人よりも生きがい意識が高い。

人口学的・社会経済的属性ごとの生きがい意識得点の平均値（高いほど生きがい感が高い）を算出してみると図表1-4のとおりであった。

男女別、年齢層別に、生きがい意識得点をみると、統計学的にみて誤差の範囲を超えた意味のある（以下、「有意な」）差異がみられた。女性は男性より、年齢層の低い人は高い人より生

生きがい意識得点が高かった。年齢層別では男女で異なった傾向がみられ、女性では年齢層の低い人の方が高い人より生きがい意識が有意に高かったが、男性では年齢層の高低による差異はみられなかった。ただし、本研究に用いた調査データにおいて年齢層の違いによる効果を読み解く場合には注意が必要である。この調査データは、一時点における横断的な調査結果によるものなので、年齢層による生きがい意識得点の違いが、心身が老いることによる加齢の影響なのか、それともほぼ同時代に生まれた人々の一定のまとまり（コーホート）の新旧による影響なのかを見分けることができない。つまり、この調査でみられる年齢層による差異は、加齢による生きがい意識の差異とコーホート間における生きがい意識の差異が複合したものである（注4）。

暮らし向き別、現在の就業別、学歴別にも生きがい意識得点に有意な差異がみられた。暮らしにゆとりがある人の方がゆとりのない人より、就業者の方が不就業者より、高学歴の人の方が低学歴の人より、生きがい意識得点が高かった。ただし、学歴別については、短大・高専の卒業者のほうが大学卒業者より生きがい意識がわずかに高くなっている。

なお既存研究では、世帯年収が多いことや仕事をもっていること、高学歴であることが高齢期の幸福感を高める要因になっているという知見を得たものがある（注5）。

図表 1-4 人口学的・社会経済的属性別 生きがい意識の平均値

基本属性		生きがい意識の平均値
性別	**	女 2.58 (1,128) > 男 2.21 (904)
年齢層	*	50-64歳 2.50 (988) > 65-74歳 2.40 (670) > 75-84歳 2.24 (378)
	-	50-64歳 2.28 (406) 65-74歳 2.18 (311) 75-84歳 2.10 (187)
	*	50-64歳 2.65 (581) > 65-74歳 2.57 (355) > 75-84歳 2.38 (191)
暮らし向き	**	ゆとりあり 2.65 (902) > ゆとりなし 2.22 (1,126)
	**	ゆとりあり 2.54 (385) > ゆとりなし 1.95 (513)
	**	ゆとりあり 2.72 (514) > ゆとりなし 2.45 (601)
現在の就業	**	就業あり 2.60 (945) > 就業なし 2.27 (985)
	**	就業あり 2.41 (512) > 就業なし 1.94 (340)
	**	就業あり 2.82 (426) > 就業なし 2.44 (640)
学歴	**	大学 2.60 (480) < 短大・高専 2.62 (282) > 高校 2.39 (861) > 中学 2.11 (386)
	**	大学 2.44 (345) > 短大・高専 2.40 (52) > 高校 2.10 (326) > 中学 1.91 (167)
	**	大学 3.00 (133) > 短大・高専 2.66 (229) > 高校 2.56 (531) > 中学 2.29 (213)

・ ** 1%水準で有意差あり。* 5%水準で有意差あり。不等号は有意差がある場合にのみ用いた。()内は人数

（3）健康状態・家族構成と生きがい意識

健康状態のよい人は、そうでない人より生きがい意識が高い。また、2人暮らし以上の人、配偶者のいる人は、そうでない人より生きがい意識が高い。

健康状態ごとの平均点を算出してみると図表 1-5 のとおりであった。主観的健康感とは健康度の自己評価のことで「ふだんご自分で健康だと思いますか」に対する回答である。これに加えて、客観的な健康度を測定する指標として外出頻度と通院頻度を取りあげている（注6）。

予想されるように、健康状態別に生きがい意識得点に有意な違いがみられた。主観的健康感の高い人の方が低い人より、外出行動の活発な人の方が不活発な人より、病院に通っていない人の方が度々通っている人より、生きがい意識得点が高かった。通院頻度別では男女で異なった傾向がみられ、男性では病院に通っていない人の方がよく通っている人より生きがい意識得点が高かったが、女性では通院頻度の高低による違いはみられなかった。

なお既存研究の多くは、健康状態のよいことが生活の質を高めていると報告している。また、外出行動や外出しやすい住環境の効果をみとめた報告もみられる（注7）。

図表 1-5 健康状態別 生きがい意識の平均値

健康状態		生きがい意識の平均値	
主観的健康感	男	**	とても健康 3.05 (261) > まあ健康 2.43 (1,332) > あまり健康でない 2.03 (305) > 健康でない 1.90 (134)
	女	**	とても健康 2.93 (114) > まあ健康 2.21 (595) > あまり健康でない 1.83 (132) > 健康でない 1.64 (61)
	女	**	とても健康 3.14 (146) > まあ健康 2.61 (736) > あまり健康でない 2.17 (171) > 健康でない 2.10 (72)
外出頻度	男	**	高頻度 2.56 (1,184) > やや高頻度 2.34 (385) > やや低頻度 2.23 (314) > 低頻度 1.87 (154)
	女	**	高頻度 2.37 (598) > やや高頻度 2.06 (136) > やや低頻度 1.79 (106) > 低頻度 1.65 (60)
	女	**	高頻度 2.76(580) > やや高頻度 2.51 (244) > やや低頻度 2.43 (204) > 低頻度 2.01 (94)
通院頻度	男	*	低頻度 2.49 (925) > 中頻度 2.39 (904) > 高頻度 2.20(206)
	女	*	低頻度 2.33 (421) > 中頻度 2.14 (398) > 高頻度 1.93(82)
	女	-	低頻度 2.62 (499) 中頻度 2.59 (500) 高頻度 2.38(120)

・ ** 1%水準で有意差あり。* 5%水準で有意差あり。不等号は有意差がある場合にのみ用いた。()内は人数

次に、生きがい意識と家族の関連をみてみよう。老化の社会的側面を取り扱う社会老年学の分野では、長寿社会と家族規範の変化の中で、高齢期の幸せや満足感など生活の質の維持・向上にとって、配偶者や子どもとの関係がどのような影響を及ぼしているのかが、介護や福祉サービスへの関心と並んで主要な関心事の一つとなってきた。例えば、都内の60歳から75歳を対象とし、高齢期の幸福感を心理状態や満足感などで構成されるモラール尺度と呼ばれる変数で測定した1980年代末の調査は、配偶者の有無が家族構成のうちでもっとも高齢者の幸福感に影響を与えており、子どもとの同居や子どもがいること、別居の子どもや親族との交際頻度は高齢者の幸せに明らかな影響を及ぼしてはいないと報告している（注8）。

他方、近年の全国的な家族・世帯の客観的状況に目を移せば、2009年に実施された国立社会保障・人口問題研究所による世帯動態調査結果が参考になる。平均世帯規模は前回調査（2004年）に比べ縮小しており、とくに60歳代以上になると2人世帯の占める割合が上昇し、女性では男性に比べ高齢層の1人世帯の割合が高くなっている。65歳以上では18歳以上の子どもをもつ人の割合は9割台半ば近くに達しているが、18歳以上の子と同居する割合は、60歳代後半から70歳代前半で4割台前半ともっとも低くなり、その後高齢になるほど同居割合は高くなる。前回調査に比べると同居割合は低下しているのが現状である。このような家族のかたちの全般的な動向は、少子高齢化の中でさらに変化していくと思われるが、家族のかたちが生きがい意識にいかなる影響を及ぼすのか、この点は世帯の解体と縮小の傾向とともに今後も注視していく必要がある。

それでは、八王子市中高年の現状はどのようなになっているだろうか。図表 1-6 は家族構成別の生きがい意識得点の平均点である。1人暮らしか否かでみると、2人暮らし以上の人の生きがい意識得点は1人暮らしの人より有意に高い。配偶者の有無別にみると、有配偶の人の生きがい意識得点は無配偶の人より有意に高い。子どもの有無別にみると、男性では子どものいる人の方が子どものいない人より生きがい意識得点が有意に高いが、女性では有意な差はみられなかった。子どもとの同居・別居別にみると、男性は子どもとの同居者の生きがい意識得点が有意に高いが、女性の場合は有意な差異がみられない。子どもの人数別にみると、男女で異なる傾向がみられ、男性の場合、子どもの人数が多い人の方が生きがい意識得点が高いが、女性の場合、子どもが1人いる人よりも子どもがいない人の方が生きがい意識得点が高くなっている。

以上が基本属性別にみた生きがい意識であるが、実はこれらの属性は相互に関連しあっているものである。例えば、1人暮らしか否かと配偶者の有無は当然関連しているし、暮らし向きと就業状態も関連しているだろう。また、主観的健康感と外出頻度も関連しているなど、各変数は生きがい意識との関連だけではなく、相互にからまりあっている。そこで、第1章の4節では、他の変数の影響をとり除いた場合の生きがい意識との関連をみていくことにする。

図表 1-6 家族構成別 生きがい意識の平均値

家族構成		生きがい意識の平均値	
1人暮らしか否か	男	**	2人暮らし以上 2.47 (1,808) > 1人暮らし 1.95 (219)
	女	**	2人暮らし以上 2.26 (821) > 1人暮らし 1.65 (83)
	女	**	2人暮らし以上 2.67 (983) > 1人暮らし 2.14 (136)
配偶者の有無	男	**	配偶者有 2.48 (1,593) > 配偶者無 2.18 (440)
	女	**	配偶者有 2.30 (769) > 配偶者無 1.70 (135)
	女	**	配偶者有 2.66 (820) > 配偶者無 2.38 (304)
子どもの有無	男	*	子ども有 2.45 (1,820) > 子ども無 2.14 (227)
	女	*	子ども有 2.26 (786) > 子ども無 1.86 (118)
	女	-	子ども有 2.59 (1,020) 子ども無 2.46 (108)
子どもとの同居・別居 (子ども無を除く)	男	**	同居 2.52 (1,024) > 別居 2.37 (743)
	女	*	同居 2.52 (1,024) > 別居 2.37 (743)
	女	-	同居 2.65 (573) 別居 2.53 (426)
子どもの人数	男	**	2人以上 2.50 (1,505) > 1人 2.20 (315) > 0人 2.14 (227)
	女	**	2人以上 2.31 (645) > 1人 2.01 (141) > 0人 1.86 (118)
	女	*	2人以上 2.64 (847) > 1人 2.34 (173) < 0人 2.46 (108)

・ ** 1%水準で有意差あり。* 5%水準で有意差あり。不等号は有意差がある場合にのみ用いた。()内は人数

3. 他者とのつながりは生きがい意識に影響を与えているのか

(1) パーソナル・ネットワークと生きがい意識

親しい他者が多い人は、そうでない人より生きがい意識が高い。

さて、社会経済的属性や家族構成といった基本属性が中高年の生きがい意識に一定の影響を与えていることが判明したが、個人が生活の中で、家族を含めた他者と取り結んでいるさまざまな人間関係は生きがい意識にどのような影響を与えているのだろうか。前節の結果によれば、子どもの有無などの家族構成は、とくに女性の場合、生きがい意識に大きな影響を与えてはいない。だとすれば、友人との交際や趣味の団体への参加、日頃から取り結んでいる人間関係の密度といった要因の方が生きがい意識に影響を与えている可能性もある。そこでまず、特定の個人を原点に取り結ばれる選択的な社会関係であるパーソナル・ネットワークの大きさと生きがい意識との関連をみてみよう。

日頃から頼りにし親しくしている同居の家族以外の親族数や隣人数、また友人数（親族・近所の人を除く）といった、個人を中心としたネットワークの大きさを、それぞれ5つの規模別カテゴリーに分類し、生きがい意識に差異があるかどうかを検討した。その結果が図表 1-7 である。

すべての項目で男女ともに親しい他者の規模別に生きがい意識得点に有意な差がみられ、全般的にいて頼りにし親しくしている他者が多い人の方が、親しい人がまったくいない人や相対的に少ない人に比べて生きがい意識得点が高かった（注9）。とくに、男性の場合、親しくしている親族や近所の人、友人がそれぞれまったくいない人の生きがい意識得点の平均値が低くなっていることがわかる。加えて度数分布からは、男性の場合、親しい近所の人と親しい友人が0人と回答した割合がもっとも多く、前者が44.6%、後者が34.9%であること、女性よりも

その割合が明らかに高くなっていることは注目に値する（注 10）。

以上より、親しい他者の人数は生きがい意識に一定の影響を与えていることがうかがわれる。

図表 1-7 パーソナル・ネットワーク規模別 生きがい意識の平均値

パーソナル・ネットワーク規模		生きがい意識の平均値
親しい親族規模	男	** 5人以上 2.62 (561) > 3～4人 2.50 (514) > 2人 2.30 (510) > 1人 2.23 (287) > 0人 2.14 (167)
	女	** 5人以上 2.43 (249) > 3～4人 2.37 (200) > 2人 2.11 (234) > 1人 1.99 (122) > 0人 1.81 (96)
	女	** 5人以上 2.80 (309) > 3～4人 2.57 (311) > 2人 2.46 (273) > 1人 2.39 (163) < 0人 2.60 (67)
親しい近隣規模	男	** 5人以上 2.76 (373) > 3～4人 2.63 (359) > 2人 2.41 (324) > 1人 2.35 (212) > 0人 2.17 (771)
	女	** 5人以上 2.67 (162) > 3～4人 2.50 (137) > 2人 2.06 (115) < 1人 2.13 (85) > 0人 1.98 (402)
	女	** 5人以上 2.83 (208) > 3～4人 2.71 (222) > 2人 2.60 (206) > 1人 2.49 (126) > 0人 2.38 (361)
親しい友人規模	男	** 5人以上 2.92 (460) > 3～4人 2.50 (356) > 2人 2.46 (362) > 1人 2.22 (289) > 0人 2.03 (572)
	女	** 5人以上 2.79 (183) > 3～4人 2.19 (134) < 2人 2.35 (149) > 1人 2.02 (120) > 0人 1.88 (315)
	女	** 5人以上 3.00 (275) > 3～4人 2.70 (220) > 2人 2.52 (211) > 1人 2.36 (168) > 0人 2.22 (249)

・ ** 1%水準で有意差あり。不等号は有意差がある場合にのみ用いた。()内は人数

（２）団体活動への参加と生きがい意識

団体活動に参加している人は、そうでない人より生きがい意識が高い。

次に、過去と現在を含めて団体活動に参加した経験をもっているかどうか、現在団体活動に参加しているか、現在いくつぐらいの団体活動に参加しているか、という３つの観点から、生きがい意識に差異があるかどうかを調べた。活動への参加の有無は、町会・自治会・マンション管理組合といった地縁団体、老人クラブ、教育や子育て、趣味・スポーツ、これら以外の市民活動、その他の種類の団体の６つについて参加状況をたずね、これらの団体のいずれかに参加している人と参加していない人に分けて捉えた。団体活動への参加と他者とのつながりの形成は、相互に原因と結果の関係になり得るが、ここでは他者とのつながりを形成する文脈の一端として団体活動を捉えたものである。その結果は図表 1-8 のとおりであった。

男女ともに団体活動への参加経験の有無別、現在の団体参加の有無別に生きがい意識得点に有意な差がみられ、団体活動への参加者の方が不参加者よりも生きがい意識得点が高かった。また、現在の参加団体の数の大小によって生きがい意識得点に差がみられ、参加団体数が多い人の方が、生きがい意識得点が高かった（注 11）。

これらの結果から、団体活動への参加が生きがい意識の形成に一定の影響を与えていることがうかがわれる。

図表 1-8 団体活動への参加状況別 生きがい意識の平均値

団体参加		生きがい意識の平均値
団体参加経験の有無	男	** 参加有 2.46 (1,407) > 参加無 1.90 (244)
	女	** 参加有 2.27 (623) > 参加無 1.80 (142)
	女	** 参加有 2.61 (782) > 参加無 2.07 (96)
現在の団体参加の有無	男	** 参加有 2.56 (1,220) > 参加無 2.02 (566)
	女	** 参加有 2.37 (541) > 参加無 1.85 (279)
	女	** 参加有 2.71 (674) > 参加無 2.20 (280)
現在の団体参加の程度	男	** 3団体以上参加 2.86 (304) > 2団体参加 2.63 (335) > 1団体参加 2.37 (581) > 不参加 2.02 (566)
	女	** 3団体以上参加 2.76 (144) > 2団体参加 2.37 (133) > 1団体参加 2.16 (264) > 不参加 1.85 (279)
	女	** 3団体以上参加 2.92 (158) > 2団体参加 2.81 (201) > 1団体参加 2.54 (315) > 不参加 2.20 (280)

・ ** 1%水準で有意差あり。不等号は有意差がある場合にのみ用いた。()内は人数

（３）ソーシャル・サポートと生きがい意識

サポート授受の関係の網の目が充実している人は、そうでない人より生きがい意識が高い。

続いて、個人が他者との間で取り交わすさまざまな支援関係の種類と、支援関係にある他者の種類の多様性に着目し、生きがい意識得点に差異があるかどうかを調べた。結果は**図表 1-9**に示した。

他者と「どのような関係」をもっているかという社会関係の機能や質の側面のことをソーシャル・サポートと呼ぶが、まずサポートの授受の方向性からソーシャル・サポートの種類を２つに分類した（注 12）。一つは、調査対象者である中高年個人が、他者からサポートを受けた実績や、サポートを受けることを期待するという入手可能性の認知に注目したもので、ここでは「受領サポート」と総称する。今一つは、中高年個人が、他者にサポートを提供した実績や、提供できるという発信可能性の認知に注目したもので、ここでは「提供サポート」と総称する。どちらも、実際の経験（実績）とサポートが必要になったときの可能性（期待）を含めてソーシャル・サポートとして捉えることとした。

サポートの内容については、既存研究を参考に、情緒的サポートと手段的サポートの大きく２つの機能に分かれるものと仮定して、質問項目を設定した。情緒的サポートは、悩みを聞く、元気づけるなどの行為を指し、手段的サポートは、手伝い、物を貸す、看病をするなどの行為を指している。

最後に、サポートを数量的に把握するために、中高年が「どのような他者」と関係を築いているかという社会関係の構造の側面を、サポートの相手方の種類の多様性という点に情報を縮約し、サポート・ネットワークの量として把握した。

具体的な質問項目は、**図表 1-10**に示すとおり、受領サポート５項目、提供サポート４項目である。なお、「声かけ」に関するサポートは、近年の地域活動における具体的取り組みを参考に、サポートの一種として質問項目に組み込んだ。その結果、「声かけ」に関するサポートは受領・提供ともに、情緒的サポートと親和性が高いことが明らかとなったため、情緒的サポートに分類した（注 13）。受領サポートについては、同居家族、別居子・別居親、それ以外の親族、近所の人、仕事関係の人、上記以外の親しい友人、その他の知人、地域の住民組織、市民活動組織、福祉や医療の関係者、その他の専門サービスの 11 の主体別に入手期待の有無をたずねたものである。提供サポートについては、上記の受領サポートの相手方のうち、同居家族～その他の知人までの 7 つの主体別に提供可能性の有無をたずねたものである。

以上の手続きを経て、サポートの授受の方向性別、機能別に合計で 4 つのサポート・ネットワークの量（以下、「サポート量」）を、「少ない」～「多い」までの 4 つのカテゴリーに再区分して尺度を構成した（注 14）。

サポートの種類ごとに、サポート量別にみた生きがい意識得点に差異が表れるかどうかを検討したところ、すべての項目で男女ともに生きがい意識得点に有意な差がみられ、受領サポートや提供サポートの相手方が多い人ほど、サポートの相手方が少ない人よりも生きがい意識得点が高かった。なお、生きがい意識は、受領サポート量の程度よりも提供サポート量の程度との関連が強くなっている。既存研究のなかでは、サポートに対する期待にストレス緩衝効果があることや、受領サポートよりも提供サポートの方がやや多いときに高齢期の幸福感が高まるとする報告もみられる。また、ボランティア活動など援助行動の経験が援助者自身に与える影響として、人間関係の広がりや人生への意欲喚起といった肯定的な影響があることを報告したのもみられる（注 15）。

以上を踏まえれば、特定の個人をとりまくサポート授受の関係の網の目が充実しているという事実は、生きがい意識の形成に一定の影響を与えている。とくに、今回の八王子市中高年世代調査において、受領サポートに比べると提供サポートの方が、生きがい意識との関連が若干強くなっていることを参考にすれば、他者を助けることや人の役に立つことが中高年の自尊心や心理的安寧に結びついているとみることができよう。しかし、サポートを提供できる相手方が多様であったり、多かたりする人は、健康に自信がある人に限られている可能性もあるので、次にその点も含め検討しよう。

図表 1-9 サポートの種類別 生きがい意識の平均値

サポートの種類		生きがい意識の平均値	
他者に期待する情緒的支援	男	**	多い 2.84 (585) > やや多い 2.47 (503) > やや少ない 2.25 (506) > 少ない 1.98 (429)
	女	**	多い 2.68 (211) > やや多い 2.35 (191) > やや少ない 2.12 (226) > 少ない 1.83 (268)
	女	**	多い 2.94 (373) > やや多い 2.53 (308) > やや少ない 2.36 (278) > 少ない 2.26 (155)
他者に期待する手段的支援	男	**	多い 2.78 (449) > やや多い 2.47 (706) > やや少ない 2.30 (720) > 少ない 1.64 (132)
	女	**	多い 2.61 (180) > やや多い 2.30 (264) > やや少ない 2.15 (356) > 少ない 1.44 (89)
	女	**	多い 2.90 (268) > やや多い 2.57 (438) > やや少ない 2.44 (357) > 少ない 2.07 (42)
他者に提供できる情緒的支援	男	**	多い 2.94 (478) > やや多い 2.57 (615) > やや少ない 2.16 (498) > 少ない 1.94 (418)
	女	**	多い 2.76(154) > やや多い 2.45 (233) > やや少ない 2.10 (246) > 少ない 1.78 (256)
	女	**	多い 3.02 (323) > やや多い 2.64 (380) > やや少ない 2.20 (248) > 少ない 2.22 (156)
他者に提供できる手段的支援	男	**	多い 2.80 (692) > やや多い 2.51 (361) > やや少ない 2.25 (728) > 少ない 1.65 (194)
	女	**	多い 2.64 (248) > やや多い 2.33 (152) > やや少ない 2.12 (380) > 少ない 1.44 (101)
	女	**	多い 2.89 (443) > やや多い 2.62 (206) > やや少ない 2.39 (340) > 少ない 1.89 (92)

・ ** 1%水準で有意差あり。不等号は有意差がある場合にのみ用いた。()内は人数

図表 1-10 サポートの種類に関する質問項目と分類

【受領サポート】

- ① 個人的な悩みや心配事を聞いてくれる相手 【情緒】
- ② 気軽におしゃべりをしたり気晴らしをする相手 【情緒】
- ③ とくに用事がなくても、変わったことがないか、あなたに声をかけてくれる相手 【情緒】
- ④ ちょっとした用事やおつかいをしてくれる相手 【手段】
- ⑤ あなたの体調が悪いとき、世話をしてくれる相手 【手段】

【提供サポート】

- ① 個人的な悩みや心配事を、あなたが聞いてあげる相手 【情緒】
- ② とくに用事がなくても、変わったことがないか、あなたが声をかける相手 【情緒】
- ③ ちょっとした用事やおつかいを、あなたが引き受けてあげる相手 【手段】
- ④ 体調の悪い人がいるとき、あなたが世話をしてあげる相手 【手段】

4. どのような人が生きがいを感じているのか —他者とのつながりの効果—

他の要因が生きがい意識に与えている影響を考慮してもなお、他者とのつながりは生きがい意識を高めている要因である。

ここまで、八王子市の中高年個人がもつさまざまな特性ごとに生きがい意識に差異があるかどうかを、生きがい意識得点の平均値を比較することによって検討してきた。しかし、先にも述べたように、とりあげてきた基本属性や他者とのつながりの特性は相互に関連し合っており、ある変数によって生きがい意識に差異がみられても、それはみせかけの相関にすぎず実は他の特性による差異である、といった可能性が残されている。生きがい意識には性別で差がみられたが、生きがい意識の高低を決めているのは性別の違いだけではなく、ライフスタイルの違いといったさまざまな要因が考えられる。

そこで、ここまでとりあげた特性による影響を相対的に比較したうえでなお、他者とのつながりが生きがい意識にとって重要なのかを確認しておこう。これまでの変数群の中から、生きがい意識との関連が比較的強く、かつ、直接的な効果をもたらしていると仮定できる変数を選択したうえで、他の変数の影響を統制したときの各変数の生きがい意識に対する影響をみるための重回帰分析を行った（注 16）。なお、年齢層は、年齢による生きがい意識の差異を、前述した制約がありながらも推測するためには重要な変数であるが、生きがい意識との相関が弱く、かつ、男性における年齢層による生きがい意識の差異は統計学的にみて誤差の範囲を超えないことから、重回帰分析には投入しないこととした。

先の分析からは、性別によって生きがい意識に差異がみられることや男女で重要な変数が異なることがわかっており、また、既存研究からは高齢期の心理状態や満足感などを表すモラル尺度に影響を与える要因は男女で異なることが指摘されているため、重回帰分析は男女それぞれに行った。

その結果は**図表 1-11、図表 1-12**のとおりである（注 17）。なお、標準偏回帰係数 β は、他の変数間の相関関係を除去した場合の生きがい意識と当該変数との相関を表しており、絶対値が 1 に近いほど生きがい意識との関連が強く、正の相関の場合、生きがい意識を高める要因となっていることを表している。標準偏回帰係数が表している意味を具体的な例で説明すると、現在働いている人は働いていない人に比べて生きがい意識が高いが、働いているという条件が同じ人たちの場合、健康度の自己評価が高い人の方が低い人よりも生きがい意識が高いことを示している。なお、相関係数 r は生きがい意識と各変数との単相関係数で、他の変数の影響は考慮していない数字である。

生きがい意識にとって他者とのつながりが重要なのではないかという仮説を検討するため、重回帰分析には男女各 3 つのパターンを用意した。つまり、基本属性のみで生きがい意識の高低を説明するよりも、パーソナル・ネットワークの大きさや、団体活動への参加などを加えて生きがい意識を説明した方が、より適切であることを、3 つのパターンを比較することによって明らかにしていく。

まず、男女の各モデル 1 は、説明したい現象である従属変数を生きがい意識得点、生きがい意識得点の高低の原因となる独立変数を、配偶者の有無（女性では世帯人数を採用）、就業の有無、暮らし向きのゆとり、主観的健康感の 4 つの基本属性とした分析の結果である。

基本属性の中では、男性の場合、健康状態がよいこと、暮らし向きにゆとりがあること、配偶者がいること、及び現在働いていることのすべてが、変数間の相関関係を除去してもなお生きがい意識を高めることに対して効果をもっている。また、この順で、生きがい意識に相対的に強い影響を与えているので、4 つの変数の中では、健康状態のよいことが生きがい意識を高めることにとつてもっとも強い影響を与えていることがわかる。

女性の場合、健康状態がよいこと、現在働いていること、1 人暮らしではないこと、暮らし向きにゆとりがあること、この順で、変数間の相関関係を除去しても、なお生きがい意識を高めることに対して効果をもっている。女性においても、健康状態のよいことが生きがい意識を高めることにとつてもっとも影響を与えていることがわかる。

モデル 2 は、上記のモデル 1 の 4 つの基本属性に、他者とのつながりを表す概念の一つであるパーソナル・ネットワークの大きさを、親族規模、近隣規模、友人規模の 3 項目について加えたものである。男女とも、この 3 つの変数を追加したことにより、生きがい意識を説明するモデルの適合度を表す重相関係数の値は上昇しており、より生きがい意識を説明しやすくなっている。男性では、友人や近隣に親しい人が多いこと、女性では親しい友人が多いことが生き

がい意識を高めることに効果をもっていることがわかる。

モデル3は、モデル2で生きがい意識に効果をもった変数に加えて、他者とのつながりについて、男性は現在の団体参加の程度と他者に提供できる手段的サポートの2つを追加したものである。女性は、現在の団体参加の程度と他者に提供できる情緒的サポートの2つを追加した。

男女ともに、これらの2つずつの変数を追加したことにより、モデルの適合度を表す重相関係数の値は上昇し、生きがい意識に対する説明力は高まっている。そして、男性では健康状態がよいこと、暮らし向きにゆとりがあること、手段的サポートを提供できる相手方が多様であること、現在複数の団体活動に参加していること、現在働いていることが、変数間の影響関係を除去してもなお生きがい意識を高める効果をもっている。中でも、生きがい意識と相対的にもっとも関連が強いのは、健康度の自己評価が高いことである。なお、他者とのつながりのうち、団体参加の程度や他者に提供できる支援を加えて分析した結果、男性においては、親しい親族の数、配偶者がいること、親しい近所の人の数は生きがい意識の高低に影響を及ぼさないことがわかった。

女性は、情緒的サポートを提供できる相手方が多様であること、健康状態がよいこと、現在複数の団体活動に参加していること、1人暮らしではないこと、親しい友人数が多いこと、現在働いていることが生きがい意識を高めることに対して効果をもっている。中でも、情緒的サポートを提供できる相手方が多様であることが、生きがい意識に相対的にもっとも強い影響を与えている。

図表 1-11 男性の生きがい意識（重回帰分析結果）

変数	男性の生きがい意識					
	モデル1		モデル2		モデル3	
	r	β	r	β	r	β
配偶者の有無（有）	.186 **	.123 **	.186 **	.098 **	.197 **	.060 -
現在就業の有無（有）	.201 **	.111 **	.200 **	.107 **	.213 **	.121 **
暮らし向き（ゆとりあり）	.257 **	.198 **	.257 **	.181 **	.262 **	.172 **
主観的健康感（とても健康）	.286 **	.220 **	.286 **	.194 **	.302 **	.179 **
親族規模（5人以上）			.188 **	.028 -		
近隣規模（5人以上）			.249 **	.136 **	.252 **	.072 -
友人規模（5人以上）			.288 **	.143 **	.290 **	.105 **
団体参加の程度（3団体以上）					.282 **	.138 **
他者に提供できる手段的支援（多い）					.306 **	.147 **
R（重相関係数）		.399 **		.471 **		.519 **
n（ケース数）		846		845		762

・ rは相関係数、 β は標準偏回帰係数で、それぞれ平均0、分散1の値をとる

・ ** 1%水準で有意差あり。* 5%水準で有意差あり。-は有意差なし

図表 1-12 女性の生きがい意識（重回帰分析結果）

変数	女性の生きがい意識					
	モデル1		モデル2		モデル3	
	r	β	r	β	r	β
世帯人数（2人暮らし以上）	.148 **	.125 **	.148 **	.127 **	.159 **	.112 **
現在就業の有無（有）	.161 **	.130 **	.160 **	.125 **	.146 **	.109 **
暮らし向き（ゆとりあり）	.117 **	.093 **	.116 **	.073 *	.098 **	.049 -
主観的健康感（とても健康）	.237 **	.188 **	.235 **	.157 **	.229 **	.128 **
親族規模（5人以上）			.109 **	-.002 -		
近隣規模（5人以上）			.159 **	.052 -		
友人規模（5人以上）			.247 **	.185 **	.236 **	.111 **
団体参加の程度（3団体以上）					.217 **	.122 **
他者に提供できる情緒的支援（多い）					.289 **	.157 **
R（重相関係数）	.308 **		.371 **		.407 **	
n（ケース数）	1048		1046		885	

- ・ rは相関係数、 β は標準偏回帰係数で、それぞれ平均0、分散1の値をとる
- ・ ** 1%水準で有意差あり。* 5%水準で有意差あり。-は有意差なし

5. 小括

中高年世代の生きがいの獲得にとっては、健康や経済的安定に加えて、他者とのつながりの形成が重要な役割を果たしている。高齢期に起こりがちな事情を抱えても、自己の役割を感じられる機会を創出していく必要があるのではないか。

本章の主眼は、はじめに示したように「八王子市の中高年世代の生きがいにとって、家族や友人、町会・自治会やボランティアなどの団体活動への参加といった、さまざまな他者とのつながりが果たしている役割を明らかにする」ことであった。

ここまでの結論としては、男女でいくらかの差はあるが、年齢層を問わず、暮らしの中でさまざまな他者と築きあげている人間関係において、多様な関係性にある他者をサポートするという側面での自己の役割意識がある人、複数の団体活動に参加している人、頼りにし親しくしている友人の数が多く、このような特性をもつ人の生きがい意識が高いということである。つまり、こうしたライフスタイルが生きがい意識を高める方向に作用している。中高年世代の生きがい感と関連が高いのは、男女に共通して、健康度と他者とのつながり、就業状態であり、男性ではこれに暮らし向きが加わり、女性では世帯人数が加わっている。

逆の見方をすれば、男女に共通して、健康でない人、自らサポートできる相手がいなかったり、そのような相手を思い描けない人、団体活動に参加していない人、頼りにし親しくしている友人のいない人、就業していない人は、そうでない人に比べて、自らの社会的役割を低く評価している。つまり、これらの特性が、生きがい意識を低める要因になっているということである。これらに加えて、男性では、暮らし向きにゆとりがないこと、女性では、1人暮らしであることが、生きがい意識を低める方向に作用している。

元気な高齢者が増えてきたといわれる今日にあっても、健康状態に懸念が出てきたり、暮らし向きが苦しくなったり、1人暮らしにならざるをえない状況が、誰にでも起こりうることを踏まえれば、このような結果は憂慮すべき事態である。ここにあげたような状況を抱えても、さまざまな他者とのつながりを保ったり、新たに形成しながら、自己の役割を強く感じられる機会を創出していくことが、社会に一層求められているということなのではないだろうか。そして、社会に求められている取り組みとは、政治・行政による支援はもとより、さまざまな特

性をもつ中高年自身の、そして多世代による工夫と営みの過程で、少しずつ育てていくものなのではないだろうか。

今回の調査結果は、個人を社会に結び付け、人生の意味づけを確かなものとするにとつて、他者とのつながりの形成が重要な役割を果たしていることが示唆されている。中高年世代の生活にとって、健康や経済的安定に加え、社会的役割が重要であることがデータから改めて浮かび上がってきたといえよう。

第2章 生きがいの対象と生きがい意識

1. 分析のねらいと使用するデータ

(1) 分析のねらい

ここまで、八王子市中高年世代の生きがい意識を高める方向に作用している要因を検討し、その重要な要因のひとつが男女ともに他者とのつながりの形成であることを明らかにしてきた。すなわち、他者と主体的にかかわるライフスタイルの中に、生活環境の中に自己の役割や居場所があるという肯定的な感覚を見出しているということができるだろう。しかし、この分析結果からは、中高年は生活の中のいかなる活動内容に喜びや楽しみを見出しているのか、喜びや楽しみを感じている活動内容が自己の役割意識を高めることとどのような関連があるのか、この点をいまだ明らかにできていない。

そこで本章では、家族や仕事、趣味活動など17項目によって調べたさまざまな生きる喜びや楽しみの対象を、性質の似通ったいくつかのグループに「生きがい特性」として分類し、どのような生きがい特性を持っている人の生きがい意識が高いのかを明らかにすることにしたい。

(2) 使用するデータと分析の流れ

生きる喜びや楽しみの対象を測定する指標としては、「生活のなかで、あなたは(ア)～(チ)のようなことに生きる喜びや楽しみを感じますか」(以下、「生きる喜びや楽しみ」という質問項目により、家族関係や職業、趣味活動など17の項目にわたって、それぞれどのくらい生きる喜びや楽しみとして認識しているかを「思わない」～「そう思う」までの4件法でたずねた。点数が高いほどその対象に対して生きる喜びや楽しみを感じていることを示している。また、第1章で生きがい意識の測定に用いた1～4点で分布する生きがい意識得点は、点数が高いほど生きがいを感じていることを示している。

中高年の幸せ感については、第1章1節における検討を踏まえて生きがい意識とは区別し、「自らの選択の結果とその行く末に対する内省的な評価」と捉えることとした。具体的には、高齢者の幸せ感の測定を主たる目的とした既存研究における主観的幸福感に関する尺度をそのまま用いるのではなく、その中で見出されてきた主観的幸福感の次元を参考に、「人生満足度」、「生活満足度」、「現在の幸せ感」、「将来への肯定感」の4項目で把握することとした。具体的には、「わたしは、これまでの人生を振り返ってみてまあ満足だ」(以下、「人生満足度」)、「わたしは、現在の生活に満足している」(以下、「現在の生活満足度」)、「現在、わたしは幸せだと思う」(以下、「現在の幸せ感」)、「これから先、なにか楽しいこと、おもしろいことがありそう」(以下、「将来への肯定感」)の4つの質問から構成し、それぞれ「思わない」～「そう思う」までの4件法でたずねた。点数が高いほど主観的幸福感が高いことを示している。

これらの指標をもとに分析は次の順で行った。①八王子市中高年世代はどのような活動内容に生きる喜びや楽しみを感じているのか、その現状を度数分布で把握する。②生きる喜びや楽しみの対象を大まかに分類し、性別や年齢層別にみた生きがい特性の構造を明らかにする。③いかなる生きがい特性が生きがい意識の高低に影響をもたらしているのかを、性別、年齢層別に明らかにする。④生きがい意識と主観的幸福感との関連を明らかにする。

以上の分析を通して、中高年期における生活の質を高めている生きがい特性を明らかにし、どのような側面が重要なのか、この点に関する知見を導き出すことにしたい。

2. 中高年世代における生きる喜びや楽しみの対象の現状

(1) 度数分布からみた生きる喜びや楽しみの対象の現状

家族に関する項目や余暇活動に関する項目は、生きる喜びや楽しみの対象だと感じている人が多い。

生きる喜びや楽しみを、どのような事柄にどのくらい感じているかについて、17項目にわたってたずねた結果が**図表 2-1**である。「そう思う」の回答が5割を超えた項目は、「子や孫の成長」(69.0%)、「家族団らんや交流」(66.3%)、「旅行」(56.3%)、「本や新聞を読むこと」(53.3%)、「テレビを観たり、ラジオを聴いたりすること」(51.5%)となっている。他方、「そう思う」の回答が2割を下回った項目は、「政治にかかわる活動」(4.1%)、「信仰にかかわる活動」(6.9%)、「町会・自治会・マンション管理組合などの地域活動」(7.6%)、「ボランティア活動や社会奉仕活動」(14.0%)、「電子メールやインターネット」(18.6%)となっている。全体的にみると家族に関する項目や余暇活動に関する項目についての肯定的回答（「そう思う」と「やや思う」の合計）が多くなっており、「職業をもって働くこと」についても6割台半ばを超える人が肯定的回答を示している。他方で、思想・信条に関する活動や、地域活動、ボランティア活動については、他の項目に比べて肯定的回答は少ない。また、新しい情報通信技術である「電子メールやインターネット」についても肯定的回答は4割台半ばを超える程度にとどまっている。

図表 2-1 生きる喜びや楽しみの対象（度数分布）

	そう思う	やや思う	あまり思わない	思わない	無回答
職業をもって働くこと	38.7 (805)	28.6 (594)	16.3 (340)	14.0 (291)	2.4 (50)
家事や家族の世話	41.4 (862)	40 (833)	12.5 (260)	4.1 (86)	1.9 (39)
町会・自治会・マンション管理組合などの地域活動	7.6 (158)	27.3 (567)	43.2 (898)	19.5 (406)	2.5 (51)
ボランティア活動や社会奉仕活動	14.0 (292)	38.3 (808)	29.3 (610)	13.4 (279)	4.4 (91)
友人づきあい	44.6 (928)	38.1 (792)	10.8 (224)	3.6 (74)	3.0 (62)
近所づきあい	26.5 (552)	45.2 (941)	19.9 (414)	5.4 (112)	2.9 (61)
家族団らんや交流	66.3 (1,380)	24.7 (513)	4.1 (86)	2.0 (42)	2.8 (59)
子や孫の成長	69.0 (1,436)	17.1 (356)	3.2 (66)	4.9 (101)	5.8 (121)
スポーツや散歩・運動	46.0 (956)	38.3 (796)	9.8 (203)	3.0 (62)	3.0 (63)
旅行	56.3 (1,172)	30.7 (638)	7.6 (159)	2.7 (56)	2.6 (55)
テレビを観たり、ラジオを聴いたりすること	51.5 (1,071)	36.4 (757)	8.8 (184)	1.2 (24)	2.1 (44)
本や新聞を読むこと	53.3 (1,109)	36.0 (749)	6.8 (141)	1.8 (37)	2.1 (44)
電子メールやインターネット	18.6 (387)	29.2 (608)	26.4 (550)	22.0 (458)	3.7 (77)
一人でする趣味活動	33.8 (702)	37.3 (776)	18.1 (377)	8.3 (173)	2.5 (52)
仲間とする趣味活動	34.2 (712)	39.3 (817)	16.1 (334)	7.8 (163)	2.6 (54)
信仰にかかわる活動	6.9 (143)	7.0 (146)	24.1 (501)	59.0 (1,228)	3.0 (62)
政治にかかわる活動	4.1 (86)	12.9 (269)	35.4 (737)	44.8 (931)	2.7 (57)

・ 数字は%、()内は人数で、n=2,080

（２）性別・年齢層と生きる喜びや楽しみの対象

生きる喜びや楽しみの対象は、性別や年齢層によって異なる。

生きる喜びや楽しみの対象の度数分布をみてきたが、これらの中には男女別、年齢層別に異なる傾向を示す項目も含まれている。男女別、年齢層別の度数分布表は省略するが、主な傾向は次にあげるとおりであった。

男女別に差異がみられる項目のうち、生きる喜びや楽しみの対象として、男性の方が女性に比べて「そう思う」と回答している割合が高いのは、「職業をもって働くこと」、「町会・自治会・マンション管理組合などの地域活動」、「政治にかかわる活動」である。他方、女性の方が男性に比べて「そう思う」と回答している割合が高いのは、「子や孫の成長」、「家族団らんや交流」、「旅行」、「テレビを観たり、ラジオを聴いたりすること」、「家事や家族の世話」、「友人づきあい」、「仲間とする趣味活動」、「信仰にかかわる活動」である。

年齢層別に差異が見られる項目のうち、年齢層が低いほど「そう思う」と回答している割合が高いのは、「職業をもって働くこと」と「電子メールやインターネット」であり、「旅行」、「スポーツや散歩・運動」、「仲間とする趣味活動」は65－74歳で「そう思う」の回答がもっとも多く、次に50－64歳、75－84歳と続いている。他方、年齢層が高いほど「そう思う」と回答している割合が高いのは、「テレビを観たり、ラジオを聴いたりすること」、「本や新聞を読むこと」、「家事や家族の世話」、「近所づきあい」、「一人でする趣味活動」、「町会・自治会・マンション管理組合などの地域活動」、「政治にかかわる活動」となっており、「子や孫の成長」と「ボランティア活動や社会奉仕活動」は65－74歳で「そう思う」の回答がもっとも多く、次に75－84歳、50－64歳と続いている。

このように、性別や年齢層によって生きがいの対象に対する反応は異なっている。反面、17項目を個別にみていく作業は複雑に過ぎる。そこで、17の指標に対する調査対象者の回答、すなわち直接データを収集した変数（以下、観測変数）の背後に共通して存在する潜在変数を探り当てる探索的因子分析を行うこととした。観測変数間がもつ内部相関の構造を捉えることで、観測変数の背後にある直接観測しがたい意味的まとまりである「因子」という潜在変数にグルーピングすることが可能となり、分析対象のもつ複雑な次元を縮約することができるからである。具体的にいえば、回答者の17項目それぞれへの反応の分布傾向から共通性を見出し、17項目をより少ない次元にまとめなおしていく。例えば、他の項目との類似性よりも「子や孫の成長」と「家族団らんや交流」との間の類似性が高いこと、これらをひとつのグループにまとめることが統計学的にみて適切かどうかを判断していく手続きを経るということである。この手法により、生きる喜びや楽しみの対象をいくつかの生きがい特性として分類していく。なお、以下の分析にあたっては、17項目それぞれについて生きる喜びや楽しみだと「思わない」に1点～「そう思う」に4点を与え、4件の間隔尺度として取り扱った。

3. 生きがいの対象 ―生きる喜びや楽しみの分類―

（１）男女別にみた生きがい特性の構造

男女で生きがい特性の構造は異なっており、男性では「社会参加」因子、女性では「趣味・余暇」因子が重要な生きがい特性である。

男女別に生きる喜びや楽しみの対象を因子分析にかけて因子負荷量をまとめた結果が図表 2-2、2-3 である。この結果における因子負荷量とは、抽出した潜在変数である因子と各変数との関係の程度を表したもので、0 は因子と質問項目との間に相関がないことを示し、絶対値

が1に近いほど因子とその質問項目との相関が強いことを表している（注1）。なお、生きる喜びや楽しみの対象の名称については、図表及び以下の文章において略して記述する。

まず、男性の生きる喜びや楽しみの対象の分類結果を要約しよう。因子1に大きな因子負荷量を示したのは、「社会奉仕」、「友人づきあい」、「近所づきあい」、「地域活動」、「仲間とする趣味活動」、「職業」の6つであった。これらは他者との交流を主としているが、「社会奉仕」への負荷が大きく、「職業」も含んでいることから、「社会参加」因子と解釈することができる。すなわち、この「社会参加」因子の得点が高い人は、ここにあげた6つの項目について、生きる喜びや楽しみを強く感じている人たちである（注2）。因子2に該当した生きがいの対象は、「家族団らん」、「子や孫の成長」、「家事や家族」、「テレビやラジオ」であり、「家庭生活」因子とまとめた。因子3は「旅行」、「一人でする趣味活動」、「本や新聞」、「電子メールやインターネット」、「スポーツや散歩・運動」の5つであったので、「趣味・余暇」因子と一括した。因子4は「政治」と「信仰」であることから、「思想・信条」因子として整理した。以上から、男性中高年の生きがい因子は、「社会参加」、「家庭生活」、「趣味・余暇」、「思想・信条」の4つに分類することができる（注3）。なお、4因子にまとめられる生きがい特性は、生きる喜びや楽しみの対象としての17項目全体の分散のうち、44.7%を説明している。因子寄与率は、17項目のデータを因子がどのくらいよく説明しているかという当てはまり具合を示したものである。例えば、第1因子である「社会参加」因子は、データ全体の分散のうちもっとも多くを説明しているが、それでも16.8%を説明しているに過ぎない。男性の生きがい特性を説明する因子の中では欠かせないものであるといえるが、「家庭生活」因子、「趣味・余暇」因子、「思想・信条」因子を加えれば、より適切にデータ全体を説明することができる。

男性中高年の生きがい特性の特徴的な点は、「社会参加」因子の寄与率が大きい点で、これは6つの多少系統の異なるようにみえる生きがい対象が複合していたことも関連しているが、17項目のうち、ここでいう「社会参加」は重要な生きがい特性であることがわかる。

図表2-2 男性の「生きる喜びや楽しみ」の対象の構造（因子分析結果）

項目	因子1 社会参加 $\alpha = .826$	因子2 家庭生活 $\alpha = .710$	因子3 趣味・余暇 $\alpha = .698$	因子4 思想・信条 $\alpha = .622$
職業	.347	.178	.177	.063
家事や家族	.307	.572	.166	.035
地域活動	.634	.221	.100	.196
社会奉仕	.688	.194	.175	.203
友人づきあい	.669	.275	.191	.064
近所づきあい	.659	.361	.035	.158
家族団らん	.311	.713	.142	-.037
子や孫の成長	.233	.584	.100	.051
スポーツや散歩・運動	.387	.314	.483	-.011
旅行	.294	.286	.529	.000
テレビやラジオ	.088	.374	.341	.035
本や新聞	.101	.420	.501	.107
電子メールやインターネット	.213	-.009	.484	.111
一人でする趣味活動	.027	.091	.510	.092
仲間とする趣味活動	.630	.083	.435	.044
信仰	.100	-.011	.059	.565
政治	.180	.072	.134	.705
因子寄与率(%)	16.8	11.9	10.3	5.7
累積寄与率(%)	16.8	28.7	39.0	44.7

・ 主因子法、バリマックス回転、n=836

次に、女性の生きがい対象の分類結果は次のとおりである。因子1に大きな因子負荷量を示したのは「本や新聞」、「電子メールやインターネット」、「旅行」、「仲間とする趣味活動」、「スポーツや散歩・運動」、「一人でする趣味活動」の6つであり、「趣味・余暇」因子と一括した。因子2は「家族団らん」、「家事や家族」、「子や孫の成長」、「テレビやラジオ」が含まれるので、「家庭生活」因子とまとめた。因子3は「近所づきあい」、「友人づきあい」の2つのみなので、「他者との交流」とまとめた。因子4は「社会奉仕」、「地域活動」、「職業」が該当したので、「社会参加」因子と名付けた。因子5は男性と同じく「政治」と「信仰」なので、「思想・信条」因子と整理した。以上から、女性中高年の生きがい因子は、「趣味・余暇」、「家庭生活」、「他者との交流」、「社会参加」、「思想・信条」の5つに分類することができる（注4）。なお、5因子にまとめられる生きる喜びや楽しみは、17項目全体の分散のうち45.0%を説明しており、生きがい特性に対する17項目の説明力は男性の場合とほぼ変わらないが、男性とは因子構造が異なっていることがわかる。

男性に比べて特徴的な点は、男性の場合「社会参加」に一括された生きがいの対象が、女性では個別的でインフォーマルな関係という側面が強い友人づきあいなどが含まれる「他者との交流」と、これに比べて制度的でフォーマルな関係という側面が強い地域活動などが含まれる「社会参加」の2つの因子として別個に分類されたことである。わかりやすく例えるならば、男性の場合はフォーマルなつきあいとインフォーマルなつきあいを明確には区別せず、職場で友人づきあいを形成しているのに対して、女性の場合はこれを区別し、それぞれ別の関係性と意味を形成しているといった違いがあるとみることができる。加えて女性に特徴的な点は、「趣味・余暇」因子がデータ全体の分散のなかでもっとも多くを説明している点であり、17項目のうち、ここでいう「趣味・余暇」が重要な生きがい特性であることがわかる。

以上より、生きがい特性の構造は、男性と女性で異なることがわかった。そこで、生きがい特性のうちどの特性が生きがい意識を高めることにつながっているのかを後の分析でみていくときには、男性と女性を別々に検討することとする。

図表 2-3 女性の「生きる喜びや楽しみ」の対象の構造（因子分析結果）

項目	因子1 趣味・余暇 $\alpha = .732$	因子2 家庭生活 $\alpha = .674$	因子3 他者との交流 $\alpha = .681$	因子4 社会参加 $\alpha = .674$	因子5 思想・信条 $\alpha = .707$
職業	.243	.045	.008	.495	.035
家事や家族	.098	.601	.080	.266	.066
地域活動	.089	.255	.290	.619	.227
社会奉仕	.202	.081	.298	.636	.224
友人づきあい	.246	.143	.630	.134	.070
近所づきあい	-.020	.354	.681	.205	.167
家族団らん	.173	.635	.181	.062	.029
子や孫の成長	.144	.589	.064	.026	-.014
スポーツや散歩・運動	.481	.287	.302	.164	.027
旅行	.499	.202	.203	.122	.018
テレビやラジオ	.287	.399	.165	-.018	.018
本や新聞	.504	.293	.123	.021	.077
電子メールやインターネット	.502	.005	.102	.291	.033
一人でする趣味活動	.456	.127	-.075	.114	.052
仲間とする趣味活動	.487	.072	.466	.244	.144
信仰	.039	-.014	.096	.094	.685
政治	.101	.077	.081	.161	.788
因子寄与率(%)	10.3	10.2	8.8	8.2	7.4
累積寄与率(%)	10.3	20.5	29.3	37.6	45.0

・ 主因子法、バリマックス回転、 $n=1,002$

(2) 年齢層別にみた生きがい特性の構造

年齢層ごとに生きがい特性の構造は異なっており、50－64 歳では「社会参加」因子、65－74 歳では「家庭生活」因子、75－84 歳では「趣味・余暇」因子が重要な生きがい特性である。

年齢層別に生きる喜びや楽しみの対象を因子分析にかけて因子負荷量をまとめた結果が図表 2-4、2-5、2-6 である。

まず、50－64 歳の生きる喜びや楽しみの対象の分類結果を簡潔に要約しよう。表の読み方は、上記の男女別の分類結果を参考にされたい。因子 1 は「社会参加」、因子 2 は「趣味・余暇」、因子 3 は「家庭生活」、因子 4 は「思想・信条」とまとめることができ、生きがい特性は 4 因子に分類することができる。50－64 歳の年齢層に特徴的な点は、男性の場合と似通っており、「社会参加」因子にインフォーマルな関係とフォーマルな関係の両方が含まれていることである。また、「社会参加」因子の寄与率が他の因子に比べて大きくなっており、50－64 歳の年齢層は、ここでいう「社会参加」が重要な生きがい特性であることがわかる。

図表 2-4 50－64 歳の「生きる喜びや楽しみ」の対象の構造（因子分析結果）

項目	因子1 社会参加 $\alpha = .809$	因子2 趣味・余暇 $\alpha = .725$	因子3 家庭生活 $\alpha = .735$	因子4 思想・信条 $\alpha = .706$
職業	.375	.171	.158	.059
家事や家族	.332	.172	.492	.070
地域活動	.661	.097	.153	.221
社会奉仕	.676	.153	.115	.195
友人づきあい	.572	.223	.253	.010
近所づきあい	.673	.059	.277	.149
家族団らん	.240	.183	.810	-.014
子や孫の成長	.182	.153	.620	.016
スポーツや散歩・運動	.384	.410	.250	.010
旅行	.260	.422	.316	-.039
テレビやラジオ	.171	.470	.264	-.019
本や新聞	.168	.680	.217	.055
電子メールやインターネット	.244	.476	.064	.088
一人でする趣味活動	.007	.534	.008	.052
仲間とする趣味活動	.572	.379	.154]	.085
信仰	.156	.017	-.017	.595
政治	.169	.103	.049	.872
因子寄与率(%)	16.0	11.2	10.5	7.4
累積寄与率(%)	16.0	27.2	37.7	45.1

・ 主因子法、バリマックス回転、n=920

次に、65－74 歳の生きる喜びや楽しみの対象の分類結果をみてみよう。因子 1 は「家庭生活」、因子 2 は「他者との交流」、因子 3 は「趣味・余暇」、因子 4 は「社会参加」、因子 5 は「思想・信条」とまとめることができ、生きがい特性は 5 因子に分類することができる。65－74 歳の年齢層にみられる特徴は、「他者との交流」と「社会参加」が別の因子として分類されること、また、「家庭生活」の寄与率が他の因子に比べ大きく、次に「他者との交流」が続いている点である。65－74 歳の年齢層は「家庭生活」が重要な生きがい特性であり、続いて個別的でインフォーマルな他者との関係である「他者との交流」が重要な位置を占めている。

図表 2-5 65-74 歳の「生きる喜びや楽しみ」の対象の構造（因子分析結果）

項目	因子1 家庭生活 $\alpha = .700$	因子2 他者との交流 $\alpha = .753$	因子3 趣味・余暇 $\alpha = .665$	因子4 社会参加 $\alpha = .637$	因子5 思想・信条 $\alpha = .622$
職業	.120	.026	.150	.311	.126
家事や家族	.595	.052	.134	.373	-.011
地域活動	.173	.255	.163	.715	.151
社会奉仕	.127	.381	.246	.548	.201
友人づきあい	.263	.724	.156	.177	.098
近所づきあい	.373	.586	.012	.371	.124
家族団らん	.761	.194	.104	.101	.060
子や孫の成長	.621	.119	.125	.074	.028
スポーツや散歩・運動	.403	.270	.490	.137	-.014
旅行	.302	.213	.505	.068	.024
テレビやラジオ	.331	.150	.198	.059	-.051
本や新聞	.352	.138	.377	.116	.045
電子メールやインターネット	.006	.139	.500	.140	.116
一人でする趣味活動	.101	-.020	.438	.109	.037
仲間とする趣味活動	.138	.597	.429	.113	.058
信仰	.005	.058	.027	.073	.670
政治	.005	.078	.112	.205	.650
因子寄与率(%)	12.4	9.9	8.8	8.0	5.9
累積寄与率(%)	12.4	22.3	31.0	39.1	45.0

・ 主因子法、バリマックス回転、n=611

最後に、75-84 歳の生きがい対象の分類結果をみてみよう。因子 1 は「趣味・余暇」、因子 2 は「社会参加」、因子 3 は「他者との交流」、因子 4 は「思想・信条」、因子 5 は「家庭生活」の 5 因子に分類することができる。75-84 歳の年齢層にみられる特徴は、「他者との交流」と「社会参加」が別の因子として分類されること、また、「趣味・余暇」の寄与率をもっとも多いが、続く「社会参加」の因子も同程度の寄与がみられること、「家庭生活」の因子の寄与率をもっとも低くなっている点である。75-84 歳の年齢層では、生きがい特性のうち「趣味・余暇」や「社会参加」が相対的に重要な位置を占めており、65-74 歳の年齢層とは異なって「家庭生活」が占める位置は小さくなっていることがわかる。

図表 2-6 75-84 歳の「生きる喜びや楽しみ」の対象の構造（因子分析結果）

項目	因子1 趣味・余暇 $\alpha = .737$	因子2 社会参加 $\alpha = .765$	因子3 他者との交流 $\alpha = .773$	因子4 思想・信条 $\alpha = .634$	因子5 家庭生活 $\alpha = .619$
職業	.134	.521	.072	.167	.099
家事や家族	.350	.289	.116	-.017	.378
地域活動	.099	.735	.208	.196	.084
社会奉仕	.071	.728	.264	.288	.073
友人づきあい	.161	.149	.798	.155	.127
近所づきあい	.182	.281	.652	.052	.179
家族団らん	.105	.072	.188	.080	.772
子や孫の成長	.164	.068	.057	.071	.583
スポーツや散歩・運動	.481	.228	.348	.255	.196
旅行	.436	.159	.211	.360	.210
テレビやラジオ	.643	.040	.192	-.001	.276
本や新聞	.767	.037	.116	.080	.070
電子メールやインターネット	.281	.175	.077	.365	-.012
一人でする趣味活動	.410	.219	-.059	.240	.154
仲間とする趣味活動	.224	.340	.392	.435	.104
信仰	.029	.094	.073	.519	.003
政治	.065	.231	.050	.663	.138
因子寄与率(%)	11.6	11.0	9.5	8.7	7.8
累積寄与率(%)	11.6	22.7	32.2	40.9	48.6

・ 主因子法、バリマックス回転、n=310

以上より、生きがい特性の構造は、年齢層ごとに異なることがわかった。そこで、生きがい特性のうち、どの特性が生きがい意識を高めることにつながっているのかを後の分析でみていくときには、年齢層ごとに別々に検討することにした。

4. 生きがい意識を高めている生きがい特性は何か

(1) 男女別にみた生きがい意識を規定する生きがい因子

男性の場合は社会参加活動が、女性の場合は趣味・余暇活動が、生きがい意識を高めることにもっとも影響を与えている。

ここまで、八王子市の中高年世代がもつ生きがい特性の構造が、性別、年齢層別に異なることをみてきた。そこで、いかなる生きがい特性が高いことが、生きがい意識を高めることに結びついているのか、この点を性別、年齢層別に検討することにした。それぞれの因子分析の結果、因子ごとに算出された各回答者の因子得点を用いて、どの生きがい特性に関する因子得点が高い人が、生活の中で自己の役割を強く見出しているのかを明らかにしていく。

説明したい現象である従属変数を男性の生きがい意識得点、生きがい意識得点の高低の原因となる独立変数を男性の4つの生きがい因子とした重回帰分析の結果が**図表 2-7**である。各因子の生きがい意識に対する説明力を標準偏回帰係数にみると、「社会参加」は 0.312、「家庭生活」は 0.281、「趣味・余暇」は 0.145 で有意であったが、「思想・信条」は生きがい意識に対して有意ではなかった。以上より、4つの生きがい因子の中では、男性の生きがい意識に対して「社会参加」の影響がもっとも強いことが明らかとなった。すなわち、社会奉仕活動や友人づきあい、近所づきあいや地域活動、仲間とする趣味活動や職業、こういった社会参加活動に生きる喜びや楽しみを強く感じている人ほど、生活の中で自己の役割を強く認識していると考えられる(注5)。結果をまとめると、社会参加活動、家庭生活、趣味・余暇活動に対して喜び・楽しみを感じているライフスタイルが、人から頼りにされたり、活躍の場があるといった生きがい意識を高める役割を果たしている。

図表 2-7 男性の生きがい意識を説明する生きがい因子（重回帰分析結果）

変数	男性の生きがい意識	
	r	β
社会参加因子	.377 **	.312 **
家庭生活因子	.351 **	.281 **
趣味・余暇因子	.220 **	.145 **
思想・信条因子	.042 -	.009 -
R (重相関係数)		.499 **
n (ケース数)		836

・ rは 相関係数、 β は標準偏回帰係数で、それぞれ平均0、分散1の値をとる

・ ** 1%水準で有意差あり。* 5%水準で有意差あり。-は有意差なし

女性の生きがい意識得点を高める要因について、5つの生きがい因子から説明しようとした重回帰分析の結果を**図表 2-8**に示した。各因子の生きがい意識に対する説明力を標準偏回帰係数にみると、「趣味・余暇」は 0.241、「社会参加」は 0.171、「家庭生活」は 0.140、「他者との交流」は 0.114 で有意であったが、「思想・信条」は生きがい意識に対して有意ではなかった。以上より、5つの生きがい因子の中では、女性の生きがい意識に対して「趣味・余暇」の影響がもっとも強いことがわかる。すなわち、趣味活動や余暇活動の中に生きる喜びや楽しみを強

く感じている人ほど、生活の中で自己の役割を強く認識していると考えられる（注6）。結果をまとめると、趣味・余暇活動、社会参加活動、家庭生活、他者との交流に対して喜び・楽しさを感じているライフスタイルが、人から頼りにされたり、活躍の場があるといった生きがい意識を高める役割を果たしている。

以上より、男性の場合は社会参加活動が、女性の場合は趣味・余暇活動が生きがい意識にもっとも影響を与える要因であることがわかった。また、「思想・信条」以外の因子にかかる活動内容に、喜び・楽しさを強く感じている人ほど、生きがい意識が高いということが出来る。

図表 2-8 女性の生きがい意識を説明する生きがい因子（重回帰分析結果）

変数	女性の生きがい意識	
	r	β
趣味・余暇因子	.288 **	.241 **
家庭生活因子	.192 **	.140 **
他者との交流因子	.186 **	.114 **
社会参加因子	.230 **	.171 **
思想・信条因子	.072 *	.043 -
R (重相関係数)		.400 **
n (ケース数)		994

・ rは 相関係数、 β は標準偏回帰係数で、それぞれ平均0、分散1の値をとる

・ ** 1%水準で有意差あり。* 5%水準で有意差あり。-は有意差なし

（2）年齢層別にみた生きがい意識を規定する生きがい因子

50-64 歳の場合は社会参加活動が、65-74 歳の場合は家庭生活が、75-84 歳の場合は趣味・余暇活動が、生きがい意識を高めることにもっとも影響を与えている。

次に、説明したい現象である従属変数を 50-64 歳の生きがい意識得点、生きがい意識得点の高低の原因となる独立変数を 50-64 歳の 4 つの生きがい因子とした重回帰分析の結果が、**図表 2-9**である。各因子の生きがい意識に対する説明力を標準偏回帰係数にみると、「社会参加」は 0.254、「家庭生活」は 0.225、「趣味・余暇」は 0.168 で有意であったが、「思想・信条」は生きがい意識に対して有意ではなかった。以上より、4 つの生きがい因子の中では、50-64 歳の生きがい意識に対して「社会参加」の影響がもっとも強いことが明らかとなった。すなわち、社会奉仕活動や近所づきあい、職業といった社会参加活動に生きる喜びや楽しさを強く感じている人ほど、生活の中で自己の役割を強く認識していると考えられる。結果をまとめると、社会参加活動、家庭生活、趣味・余暇活動に対して喜び・楽しさを感じているライフスタイルが、人から頼りにされたり、活躍の場があるといった生きがい意識を高める役割を果たしている。

図表 2-9 50-64 歳の生きがい意識を説明する生きがい因子（重回帰分析結果）

変数	50-64歳の生きがい意識	
	r	β
社会参加因子	.303 **	.254 **
趣味・余暇因子	.224 **	.168 **
家庭生活因子	.277 **	.225 **
思想・信条因子	.012 -	-.005 -
R (重相関係数)		.421 **
n (ケース数)		917

・ rは 相関係数、 β は標準偏回帰係数で、それぞれ平均0、分散1の値をとる

・ ** 1%水準で有意差あり。* 5%水準で有意差あり。-は有意差なし

65－74歳の生きがい意識得点を高める要因について、5つの生きがい因子から説明しようとした重回帰分析の結果を**図表2－10**に示した。各因子の生きがい意識に対する説明力を標準偏回帰係数にみると、「家庭生活」は0.325、「他者との交流」は0.203、「趣味・余暇」は0.149、「社会参加」は0.125、「思想・信条」は0.076で有意であり、各因子それぞれが生きがい意識に影響を与えていた。以上より、5つの生きがい因子の中では、65－74歳の生きがい意識に対して「家庭生活」の影響がもっとも強いことがわかる。すなわち、家族団らん、子や孫の成長といった家庭生活の中に生きる喜びや楽しみを強く感じている人ほど、生活の中で自己の役割を強く認識していると考えられる。併せて、友人づきあいや近所づきあいといった他者との交流についても生きがい意識を高める要因になっていることは注目される。結果をまとめると、家庭生活、他者との交流、趣味・余暇活動、社会参加活動、思想・信条に関する活動に対して喜び・楽しみを感じているライフスタイルが、人から頼りにされたり、活躍の場があるといった生きがい意識を高める役割を果たしている。

図表2－10 65－74歳の生きがい意識を説明する生きがい因子（重回帰分析結果）

変数	65-74歳の生きがい意識	
	r	β
家庭生活因子	.372 **	.325 **
他者との交流因子	.282 **	.203 **
趣味・余暇因子	.222 **	.149 **
社会参加因子	.210 **	.125 **
思想・信条因子	.096 **	.076 *
R（重相関係数）		.495 **
n（ケース数）		608

・ rは相関係数、 β は標準偏回帰係数で、それぞれ平均0、分散1の値をとる
 ・ ** 1%水準で有意差あり。* 5%水準で有意差あり。-は有意差なし

75－84歳の重回帰分析結果が**図表2－11**である。各因子の生きがい意識に対する説明力を標準偏回帰係数にみると、「趣味・余暇」は0.245、「社会参加」は0.200、「他者との交流」は0.191、「家庭生活」は0.158で有意であり、「思想・信条」は生きがい意識に対して有意でなかった。以上より、5つの生きがい因子の中では、75－84歳の生きがい意識に対して「趣味・余暇」の影響がもっとも強いことがわかる。すなわち、本や新聞を読み、テレビやラジオ、散歩や運動を楽しむ趣味・余暇活動の中に生きる喜びや楽しみを強く感じている人ほど、生活の中で自己の役割を強く認識していると考えられる。併せて、社会参加活動や他者との交流といった選択的な関係性を構築することが生きがい意識を高める要因になっていることは注目される。結果をまとめると、趣味・余暇活動、社会参加、他者との交流、家庭生活に関する活動に対して喜び・楽しみを感じているライフスタイルが、人から頼りにされたり、活躍の場があるといった生きがい意識を高める役割を果たしている。

図表 2-11 75-84 歳の生きがい意識を説明する生きがい因子（重回帰分析結果）

変数	75-84歳の生きがい意識	
	r	β
趣味・余暇因子	.285 **	.247 **
社会参加因子	.242 **	.200 **
他者との交流因子	.247 **	.191 **
思想・信条因子	.147 **	.073 -
家庭生活因子	.202 **	.158 **
R（重相関係数）		.457 **
n（ケース数）		309

・ rは 相関係数、 β は標準偏回帰係数で、それぞれ平均0、分散1の値をとる

・ ** 1%水準で有意差あり。* 5%水準で有意差あり。-は有意差なし

以上より、50-64 歳の場合は社会参加活動が、65-74 歳の場合は家庭生活が、75-84 歳の場合は趣味・余暇活動が、生きがい意識にもっとも影響を与える要因であることがわかった。また、思想・信条に関わる活動は 65-74 歳でごく弱い影響力を生きがい意識に与えているにとどまったが、その他の社会参加活動、他者との交流活動、趣味・余暇活動、家庭生活に喜び・楽しさを感じている人は、年齢層にかかわらず、生きがい意識が高いといえることができる。例えば、75-84 歳の年齢層にとって、趣味・余暇活動に楽しさをより感じている人は、感じている人に比べて自己の社会的役割を強く感じている傾向があるが、趣味・余暇活動に同じくらいの楽しさを感じている人であれば、社会参加活動に喜びを感じていない人よりも喜びを感じている人の方が、人から頼りにされたり、活躍の場があると感じているということである。

（3）生きがい意識と主観的幸福感の関連性

生きがい意識の高い人、すなわち自らの社会的役割を強く感じている人は、主観的幸福感が高く、将来に対しても明るい展望を抱いている傾向がある。

ここまで、性別、年齢層別に生きがい意識を高めている生きがい特性を探ってきた。そこから全体的にみえてきたことは、生活の中でさまざまな分野の活動にひとつひとつ楽しみや喜びを見出している人ほど自己の社会的役割を強く感じ、人生の意味づけを確かなものとしているのではないかと、いう生きがいの様相に関する仮説である。それでは、現在、自己の社会的役割を具体的に認識している人は、自らの人生を現時点でどのように評価しているのだろうか。生きがいの獲得は、人生の評価にどのように関わっているのだろうか。

第1章において中高年の主観的幸福感を、抽象的には「自らの選択の結果とその行く末に対する内省的評価」と捉える旨を示した。そこで、この主観的幸福感と生きがい意識との関連を明らかにすることとしたい。具体的には、「人生満足度」、「生活満足度」、「現在の幸福感」及び「将来への肯定感」といった自らの人生に対する内省を映し出す主観的幸福感に、役割意識からみる生きがい意識がどのように影響しているかを検討する。人から頼りにされたり、活躍の場があるという自己の役割意識は、主観的幸福感を高める要因となっているのだろうか。

主観的幸福感「思わない」～「そう思う」までの4件尺度で把握し、主観的幸福感の高低を1～4点までの得点で説明する間隔尺度とみなした。得点が高いほど主観的幸福感が高いことを示しており、生きがい意識の程度別に主観的幸福感の平均値を算出してみると図表 2-12 のとおりであった。

まず、主観的幸福感4項目の平均値は2.72～3.22で分布しており、将来の肯定感がもっとも低く、現在の幸せ感がもっとも高くなっている。現在の状況の評価やこれまでの状況の評価に比べて、「これから先、なにか楽しいこと、おもしろいことがありそうだ」という自らの行く末に対する内省的評価は低くなっていることがわかる。

次に、生きがい意識と主観的幸福感との関連をみると、生きがい意識の程度別に、主観的幸福感4項目すべての平均点に有意な差異がみられた。生きがい意識が高い人の方が低い人より、主観的幸福感が高い傾向がみられる。生きがい意識が主観的幸福感を規定する側面をもつこと、すなわち自己の社会的役割を強く認識するライフスタイルが、自らの選択の結果とその行く末に対する内省的評価を高めているとみることができる。また、4つの主観的幸福感のうち、生きがい意識がどの項目と強く関連しているかをみると、将来の肯定感との関連がもっとも強くなっている。現在、自らの役割を感じている人は感じていない人よりも、将来に対して明るい展望をもっているということであり、頼りにされ、活躍の場があることの意義がここに明確に表れているのではないだろうか。

図表 2-12 生きがい意識と主観的幸福感との関連性

主観的幸福感4項目	平均値		生きがい意識の程度別 主観的幸福感の平均値			
			高い	やや高い	やや低い	低い
人生満足度	3.03	**	3.44 (499) > 3.14 (449) > 3.01 (475) > 2.63 (609)			
生活満足度	3.02	**	3.42 (502) > 3.14 (452) > 3.03 (475) > 2.60 (608)			
現在の幸せ感	3.22	**	3.60 (501) > 3.34 (453) > 3.21 (475) > 2.82 (611)			
将来への肯定感	2.72	**	3.20 (499) > 2.89 (451) > 2.76 (474) > 2.19 (611)			

・** 1%水準で有意差あり。* 5%水準で有意差あり。不等号は有意差がある場合にのみ用いた。()内は人数

5. 小括

生活のさまざまな場面に、自ら楽しみ・喜びを見つけ出ししていくことが生きがい意識を高めると同時に、中高年自身による生活環境への主体的な働きかけが円滑に機能するような社会的仕組みの創出が重要なのではないか。

本章の主たる目的は、どのような生きがい特性が生きがい意識を高めるのかを明らかにすることであった。ここまでの端的な結論は、性別や年齢層によって生きがい意識にもっとも影響を与える生きがい特性が異なるということである。

まず生きがい特性としては、社会参加、他者との交流、家庭生活、趣味・余暇、思想・信条の全部で5つの特性を見出すことができた。ただし、男性及び50～64歳の年齢層では、友人づきあいや近所づきあいといった他者との交流が、地域活動や職業などとともに社会参加に含まれる生きがい特性に分類されることがわかった。

生きがい意識を高める方向にもっとも作用する生きがい特性は、男性の場合、社会参加活動であり、社会参加に生きがいを見出している人は、人から頼りにされ、活躍の場があると感じている傾向がみられる。女性の場合は、趣味・余暇活動と生きがい意識との関連がもっとも強く、趣味・余暇活動に生きがいを見出している人は、人から頼りにされ、活躍の場があると感じている傾向がみられる。なお男性は、家庭生活、趣味・余暇に対して生きがいを感じている人も自己の社会的役割を高く評価している。また女性の場合、社会参加、家庭生活、他者との交流に対して生きがいを感じている人も自己の社会的役割を高く評価している。

50－64歳の年齢層では社会参加活動が、65－74歳では家庭生活が、75－84歳では趣味・余暇活動が、生きがい意識にもっとも影響を与える要因である。なお、思想・信条に関わる活動は65－74歳でごく弱い影響力を生きがい意識に与えているにとどまったが、その他の生きがい特性である社会参加活動、他者との交流活動、趣味・余暇活動、家庭生活に喜び・楽しみを感じている人は、年齢層によらず自己の社会的役割を高く評価しているといえる。

また現在、自己の社会的役割という意味における生きがいを認識している人は、主観的幸福感が高く、将来に対しても相対的に明るい展望を抱いているといえることができる。

性別や年齢層によって、暮らしの中のどのような活動内容が自己の社会的役割を高めているかに差がみられるということは、生活環境の中で多くの時間を占めたり、意味的に重要な位置づけを占める活動内容が性別や年齢層によって異なっているということかもしれない。さらにいえば、年齢層によってある活動が促進されたり、制約されたりするという社会環境が存在している可能性もある。現代の社会の中で、性別や年齢層が社会の分化の準拠点になっていることを否定できないとすれば、自己肯定感を維持する役割の獲得や居場所があるという感覚には、自分自身が喜び・楽しみを感じる対象そのものが必要であるとともに、社会や他者からみとめられることも必要となっているということであろう。

このことは、中年期から高齢期にかけて、社会や他者から求められる役割移行や、家族周期段階の変化により必然的に起こる役割移行の特徴を知り、これに個々人がうまく対処・適応していくことが必要な反面、社会や制度の側が、潜在的であれ個人が求めている社会的役割を見つけ出し、その経験や能力、また意欲を引き出して、活かせる場面を創出していくことの重要性を示唆しているのではないだろうか。また、社会参加や他者との交流だけではなく、趣味や余暇、家庭生活の充実など、暮らしの中のさまざまな場面に喜び・楽しみを感じることを自己の役割意識を増幅させ、そのような個人と社会との接点が、将来を前向きに捉えることを含めて人生の意味づけを確かなものにしていくとすれば、バランスのとれたライフスタイルの効果が浮かびあがってくる。自己充足を求めて行われる生活環境への主体的な働きかけが円滑に機能する仕掛けが、私たちが歩む高齢社会の新たな段階に求められていることを、データから読み取ることができる。

第3章 高齢社会における地域社会と社会参加

1. 問題設定

(1) 地域社会への期待の高まり

近年、高齢社会におけるさまざまな課題の解決主体として地域社会に期待が寄せられている。地域社会の担い手として期待されている組織や個人の幅は広がっており、例えば、伝統的な地縁団体である町会・自治会への根強い期待もあれば、阪神・淡路大震災以降とくに都市部で活発になってきたテーマ型の組織への期待感もある。子育てを介したネットワークを地域社会の問題解決という公共的関心に発展させてきた実績をもつ女性層への期待もあれば、高度成長期に都市部に大量流入した経緯をもついわゆる団塊の世代への定年退職後の活動への期待もある。

また国・都道府県・基礎自治体のそれぞれが、高齢社会への対応という視点からだけでは捉えきれない、地域社会とのパートナーシップの推進や地域社会の再生を支援するさまざまな政策・施策を展開させている。

他方で、地域社会における具体的な取り組みは、市民や住民組織自らの発意に基づいて内側から育ちつつあるのも事実で、注目すべき事例が多数存在している。高齢社会の中で、今後の持続可能な地域社会のあり方を模索する取り組みは、「行政の」重要課題であるのみならず、「地域社会自らの」重要課題にもなっていることは疑いがない。

ところで、前2章から明らかになったのは、他者と主体的にかかわる暮らし方は、自己の役割や居場所があるという感覚を高めていること、社会参加活動、家庭生活、趣味や余暇の活動といった、さまざまな日常のひとつひとつに喜び・楽しみを感じる暮らし方は、自己の社会的役割を高く評価することに結びつき、これが中高年自身による人生の評価を高める方向に作用しているということであった。しかし、社会参加活動が個人を社会に結びつけ、幸せ感を高める効果があるとはいえ、中高年が生きる喜び・楽しみを感じている対象はさまざまで、地域や社会への貢献活動はその一部を占めているに過ぎなかった。

中高年世代の人生経験は多様であるし、それを反映して望む暮らし方は異なっており、地域や近所に対する考え方もさまざまである。したがって、地域社会への参加や社会貢献活動が、高齢期におけるとくに望ましい行動であるとして、あるべき姿を外側から設定することは非現実的であろう。

そこで本章では、地域や社会への貢献活動の担い手として期待されている中高年世代の団体活動や近隣関係などの地域や社会との接点の現状を明らかにし、どのような接点が高齢期における貢献意欲を支えているのか、その源泉を探り、地域社会活性化への手がかりを得ることを目的とする。

（２）地域社会への期待が高まる背景

高齢社会の中で地域社会が担う役割への期待がますます高まっている理由は、以下の４点にまとめることができる。第一に、高齢期にはほぼ不可避免的に心身の衰えからくる依存性が増大することから、高齢者を支援する機能をもつ場としての期待がある。都市化に伴って進んだ核家族化は、家族のかたちや役割を変容させ、高齢者の２人世帯や１人暮らしの増加をもたらしている。また、高齢期の友人関係は、定年退職などの社会的役割の変容過程や健康状態によって弱体化しやすい傾向をもっている。福祉・介護・医療などの専門的サービスだけでは十分な支援とはいええず、家族や友人に加え、居住の場近くでの支援機能をもつ社会空間として、地域社会への期待が高じている。反面、このような補完機能が期待されている地域社会自体も都市化に伴って向こう三軒両隣の結びつきを衰退させてきた側面もある。

第二に、公共課題の解決と秩序形成という政治や行政の役割が、財政の逼迫と従来型統治システムへの信頼の低下も相まって、相対化されてきているという大きな潮流がある。これは「ガバメントからガバナンスへ」といわれる、統治のしくみの転換を模索する流れでもある。高齢社会という公共課題・地域が共同で取り組むべき課題に対しても、政治や行政の課題としてだけでなく、市民や民間とともに相互協調によって取り組むことを重視したとき、ローカル・ガバナンスを支える場のひとつとして、地域社会が果たしうる役割に注目が集まっている（注1）。

第三に、定年退職や子育て期の一段落などにより、自由な時間を得た中高年のうち、とくに元気な高齢者・アクティブな高齢者の活躍の場として、地域社会が選択されるのではないかと期待がある。支援を受ける側としての高齢者ではなく、高齢社会の中の地域社会に支援を提供する主体として、地域の新たな担い手層になりうるのではないかと期待である。また高齢者による活動の活性化が、新たに多世代の市民の社会参加を促進するのではないかと期待

期待もある。

第四に、実際に、地域社会において高齢社会の課題に積極的な取り組みを続けている団体があり、がんばる地域社会としてその姿に注目が集まっているという現実がある。上記3つの期待を実践の中で体現する姿に、他のところでもやる気を出せばこのような活動が成り立つのではないかと、という期待が膨らんでいる。反面、よく聞こえてくる声には、町会・自治会の役員になり手がいない、地域活動に参加してくれるのは高齢者ばかり、活動を継続させるのが大変、といったものが多い。そのような大多数の地域を、うまくいっている先進事例と比較して批判したとしても、参加者が増えたり、活動が活発になるものでもないこともまた現実である。

このように、さまざまな期待と課題をもちながらも、地域社会を定常的なものとしてではなく、継続の上に新たに形づくられていくものとして捉え、その実践活動の中から新たな高齢社会像を模索する動きが少しずつ始まっている。

（３）使用するデータと分析の流れ

そこで、高齢社会を支えるひとつの場として、今の地域社会は、前述のような期待に応えられる条件を備えているのか、どのような側面に着目して地域や社会への貢献意欲を支えていくことが地域社会の活性化にとって重要なのか、これらに関する示唆を導き出すことにしたい。

高齢期における地域や社会への貢献意欲を測定する指標としては、「高齢期をどのように過ごしたいと思いますか」という問いの中で、「地域や社会のために尽くしたい」について「思わない」～「そう思う」までの4件法でたずねたものを使用している。また、八王子市内における地域社会の取り組みについては、町会・自治会やNPOなど12団体を対象に、活動内容に関するインタビュー調査で把握した事例をとりあげる。

具体的には、次の順で分析を進めていく。①高齢社会の課題に、八王子市内の地域社会はどのように取り組んでいるのか、いくつかの事例を紹介する。②中高年世代は、町会・自治会や趣味の団体など、どのような団体の活動に現在参加しており、今後についてはどのように考えているのかについて現状を明らかにする。③近所づきあいや地域社会との関わりの現状と考え方を明らかにする。④高齢期における地域や社会への貢献意欲の高低に影響を与えている要因を明らかにする。

2. 団体活動への参加

（１）地域社会の中のさまざまな取り組み

八王子市内において、高齢社会を支えるさまざまな活動が地域社会で積極的に行われつつあり、今後の展開が期待される。

まず、地域社会において、高齢社会の課題に積極的に取り組んでいる八王子市内の団体の活動について、活動の機能面に着目して紹介していこう。具体的には、①高齢者の日常生活支援、②地域住民が集う「場」の創出、③見守り・声かけ運動、④高齢者が活動主体となっている地域安全運動、⑤買い物の負担軽減、⑥自治会によるバスの運営、⑦町会・自治会のブロック割の再編、⑧町会・自治会の再編による地縁団体機能の継続、以上の8つの側面について、実際の活動主体と主な活動内容をみていく。

①高齢者の日常生活支援

活動主体としては、町会・自治会の中の一組織が主体となっている団体や、町会・自治会とは別組織として活動している団体がみられた。町会・自治会の一組織が主体となっている団体

としては、「片倉台福祉ネットワーク」（片倉台自治会）、「おたすけたい」（横川町住宅自治会）「ふれあいの会」（みつ台自治会）などが存在しており、高齢者や障がい者、病気時の支援として、日常生活での困りごとを手助けする活動を実施している。主な支援内容には、庭木の水やりや電球交換といった簡易なものから、電気修理や大工仕事といった手のかかるものまで多岐にわたっている。自治会によっては、病院への付き添い、ボランティア弁護士による法律相談も行っているところがみられる。これらの団体では、町会・自治会の会館内に受付窓口を設置して、利便性や信用性に配慮している。

また、町会・自治会とは別組織として活動している団体として、「めじろむつみクラブ」（めじろ台）がある。もともと老人クラブ内で立ち上がったボランティア組織が独立し、めじろ台全域の町会・自治会等と連携し合いながら、地域に根ざして活動している組織である。サービス内容は「片倉台福祉ネットワーク」などとほぼ同様だが、植木の剪定など職人的仕事まで請け負っているのが同クラブの特徴である。会員制で、支援される側も支援する側も会員となり、サービスの利用時には、会費の他に別途有償ボランティアに報酬を支払うしくみで運営されている。

②地域住民が集う「場」の創出

高齢者を中心とした地域の住民が集う「場」づくりとして、多くの町会・自治会などが「ふれあい・いきいきサロン」などの喫茶時間を設けている（注2）。

中でも積極的な事例としては、「ワイワイ・シー談話室」（横川町住宅自治会）、市民活動団体「きよびー&とまと」（清川町）があげられる。「ワイワイ・シー談話室」は、日曜日を除く毎日、午後の2時間、団地内の商店街の一角の談話室を開放しており、賑わいをみせている。世話役2名は、当番制で時給100円のボランティアとして談話室を運営している。また、「きよびー&とまと」は、水曜日と祝祭日を除く毎日11:00～17:00に、住宅地内の商店街の空店舗を借りてサロン活動を行っており、交流や憩いの場として、惣菜・ランチ・喫茶を提供している。

喫茶と類似の活動としては、高齢者を対象とした「食事会」、「お弁当会」があり、地域の住民の新たな交流の場としていくつかの町会・自治会で実施されている。

③見守り・声かけ運動

近年の新たな動きとして、孤独死の防止活動がいくつかの地域で始まっている。例えば、「めじろ台安心ねっと」（めじろ台）や「孤立・孤独死防止を考える会」（館ヶ丘自治会）があり、いずれも一つの団体で実施しているのではなく、民間事業者も含めた地域のいくつかの団体が連携を取り合おうとしている点に特徴がある。

既に八王子市では、地域包括支援センターを中心とした「高齢者見守りネットワーク事業」や、ごみ・資源物の収集の際に1人暮らし高齢者や高齢者のみの世帯に声かけも行う「高齢者等ごみ出し支援ふれあい収集」などが行われている。これらの事業では、実際に異変に気づき、大事に至らなかった例もみられる。

地域住民が主体となり、民間事業者や行政活動と連携して行われている活動として、今後の展開が注目される。

④高齢者が活動主体となっている地域安全活動

「学校安全ボランティア」、「防犯パトロール」といった地域の安全活動は、高齢社会の課題には限定されない地域社会の課題であるが、実質的にみて地域の高齢者が活動主体となって展開されているものである。

小学校で行われている登下校の見守り活動「学校安全ボランティア」は、登下校の時間帯であるからか多くの地域で高齢者によって成り立っている。毎日顔を合わせる地域の子どもたち

と高齢者の交流も生まれ、松子舞団地自治会のように年々高齢者の参加が増えている例もみられる。この他にも、犬の散歩時間を登下校時に合わせる「わんわんパトロール隊」（片倉台自治会）も行われており、他の地域のモデルとなっている。

また、多くの町会・自治会で行われている「防犯パトロール」も、高齢者が主な活動主体となっている。例えば横川町住宅自治会では、正月三が日を除く毎日、団地内の見回りをしており、50名からなる隊員の中心を成しているのは、60～70歳代である。

⑤買い物の負担軽減

高齢化した住民や食の安全のニーズに応え、近隣農家や卸売市場から新鮮野菜を購入し、地域で朝市を開く取り組みもいくつかの団体で始まりつつある。館ヶ丘自治会（不定期）や清川町の市民団体「きよびー&とまと」（定期的）など、仕入れ先は様々だが地域での評判は高い。また、横川町住宅自治会のようにリアカーによる引き売り（定期的）を認めているところもある。

これらの活動は、いずれも始まって日が浅いが、いわゆる「買い物難民」が社会問題化する中で、今後、他の地域に広がりを見せることが予想される。

⑥自治会によるバスの運営

高齢社会の今後を見越し、住民の外出手段、交通手段を確保するために、自治会でバスを運営している地域がある。高尾紅葉台自治会では、駅、スーパーと住宅団地内を巡回するバスを独自に走らせ、住民の足として活用している。通勤通学などにも利用され、高齢化が進む中で交通不便地域の取り組みとして注目される。

⑦町会・自治会内のブロック割の再編

町会・自治会では、いくつかのブロックから班長を選出する方法がとられており、その際、輪番制を用いているところが多くみられる。しかし、これまでのブロック編成や輪番制による選出では頻繁に順番がまわり、高齢化してきている住民に負担が大きく、成り手が不足していることが指摘されている。片倉台自治会では、こうした住民の負担を正面から受け止め、これまでのブロック割を再編し、自治会役員の人数を減らすことで、負担を減らそうとする取り組みを行っている。住民の年齢構成の変化に合わせ、既存のルールを見直す動きは注目される。

また、多くの町会・自治会のブロック編成は互いに背中を向け合うようなかたちの住居どうしで構成されているが、同自治会では、通りを挟んで向かい合う住居をひとまとまりとしてブロックの再編成を行い、顔を合わせやすい住民が同じブロックになるよう配慮している点も注目に値する。

⑧町会・自治会の再編による地縁団体機能の継続

これまでの自治会の区域を再編し、より広域で地域の共通課題に対応しようとする動きもみられる。館ヶ丘団地では、過去に4区域に分かれていた自治会を再編し、新たに立ち上げた「館ヶ丘自治会」を含む2自治会に再編した。広域に再編した背景には、4区域のうち2区域の自治会が、住民の高齢化に伴う人手不足のために過去に消滅せざるをえない状況に直面していた事実がある。今後は更に広域的な活動主体となって、地域課題に向き合うことを念頭に置きながら活動を開始している。

以上のように、がんばる地域社会の具体的な姿が八王子市内でも多くみられる。とりあげた事例には、町会・自治会などの伝統的な地縁団体を基礎として課題の解決に取り組んでいるものが多いが、町会・自治会と連携し合いながらも独自の活動を派生させている団体や、NPOによる地域活動も存在している。また、サービスの受け手が高齢層であると同時に、サービ

スの提供主体も高齢層である場合や、多世代の交流につながっているものもある。これらの活動は、さまざまな団体が各自の得意分野を活かしつつ、連携して地域の共通課題に取り組む萌芽といってよい。このような団体活動の叢生が、高齢社会を多方面から支える基盤を形成するとともに、潜在的な能力や地域貢献意欲をもつ市民の多様な力を引き出すことにつながるのではないだろうか。

（２）団体活動への参加状況

団体活動への参加は全体的に低調な傾向がみられる。

高齢社会の進行は地域社会にとっても共通の課題であり、ここまでみたように八王子市内においても、町会・自治会をはじめ、さまざまな団体が積極的に課題に取り組み始めている。全国的にみても、地域社会づくりの実質的な担い手として、町会・自治会をはじめとした住民主体の団体活動への期待は大きい（注３）。しかし、実際のところ、どのくらいの中高年が地域や社会との接点の一つである住民主体の団体活動に参加しているのだろうか。がんばる地域社会は、すんなりと実現できるものなのだろうか。ここからは、この点に関する疑問について具体的なデータに基づいて考えていくことにしたい。なお、一般的にはこれからとりあげていく活動は特定の地域に限定されたものではなく、地域や社会との接点を広い観点から捉えていくものである。

中高年世代の団体活動への参加の現状は図表 3-1 のとおりである。団体活動に参加している中高年世代は、必ずしも多いとはいえないことがわかる。具体的にみていこう。

町会・自治会・マンション管理組合等の地縁団体（以下、「地縁団体」）への参加について、「参加していない」と答えた人は全体の 45.0%である。その一方で、「加入して積極的に参加している」は 4.9%、「役員をしている」は 7.9%にとどまり、「参加はしている」と答えた人は 33.1%である。「参加はしている」の割合が、他の団体に比べてもっとも多くなっている点に特徴がある。町会・自治会は、地域の伝統的な住民組織として加入者が多いこと、また、マンション管理組合には区分所有者が必ず加入しているといった特性が反映されていると考えられる（注４）。

老人クラブについては、「参加していない」と答えた人は全体の 88.0%に上るが、この数字は 50 歳代も含めた数字である。そこで、年齢層ごとの参加傾向をみると（図表は省略）、75 歳以上の参加者はそれ以下の年齢層より多くなっており、「加入して積極的に参加している」は 2.7%、「役員をしている」は 6.0%、「参加はしている」は 12.9%である（無回答を除く）。高齢層での参加者が多いのが老人クラブの特徴といえる。

教育や子育てに関する団体活動については、「参加していない」と答えた人は全体の 87.9%である。その一方で、「役員をしている」は 1.2%、「加入して積極的に参加している」は 1.5%、「参加はしている」は 2.9%にとどまる。過去のどこかの時点で何らかのかたちで参加していた層が 26.0%存在している（図表は省略）が、現在の参加者は全体で 5.6%にまで大幅に減少していることから、子育て期や子どもの学校教育期の終了とともに活動から離れる人が多いと推測され、中高年世代のかかわりは少ない分野になっている。

趣味や習い事の会、健康やスポーツなどの団体やサークル（以下、「趣味の団体」）については、「参加していない」と答えた人は全体の 56.8%である。「加入して積極的に参加している」は 14.4%、「役員をしている」は 4.3%、「参加はしている」は 19.5%となっており、他の団体に比べて、「加入して積極的に参加」がもっとも多くなっているのが特徴である。さまざまな分

野にわたって、特質ある団体が多数存在している中から、自分の関心に合うものを選択できるのが趣味の団体の特徴であると考えられるため、このことが他に比べて積極的な参加者が多い要因だと推測される。

以上の諸団体以外のボランティア、非営利活動、市民活動などの団体やサークル（以下、「ボランティア活動団体」）について、「参加していない」と答えた人は全体の81.1%である。その一方で、「加入して積極的に参加している」は4.3%、「役員をしている」は2.6%、「参加はしている」は6.7%にとどまっている。

その他の種類の団体やサークル（商店会、業界団体、信仰、政治など）については、「参加していない」と答えた人は全体の81.2%である。「積極的に参加している」は2.8%、「役員をしている」は3.7%、「参加はしている」は7.9%にとどまっている。

なお、高齢期を迎えると、個人の健康状態の低下が住民主体の団体活動への参加を阻害する可能性がある。そこで、上記のうち何らかの団体活動への参加の有無と本人の健康度との関連を調べた。その結果が**図表 3-2**である。何らかの団体活動への参加者は、健康度の自己評価が低い層で56.7%、健康度の自己評価が高い層で71.4%であり、健康状態のよい人の方が団体活動に参加する傾向をもっている。しかし、健康度の低い人であっても、団体活動の参加者は56.7%で不参加者を上回っており、健康状態が万全でなくとも、団体活動への参加を続けている人も少なからずいることがうかがわれる。

以上をまとめると、団体活動への参加は全体的にみて低調であり、参加率が比較的高いのは、地縁団体と趣味の団体であることがわかる。また、健康であることは団体活動への参加を促し、そうでない場合は団体活動への参加が制約されているが、健康ではないと感じている人であっても団体活動への参加を継続している人の方が多くなっている。

図表 3-1 団体活動への参加の現状

	役員をしている	積極的に参加	参加はしている	不参加	無回答
地縁団体	7.9 (165)	4.9 (102)	33.1 (688)	45.0 (937)	9.0 (188)
老人クラブ	1.9 (40)	1.3 (26)	4.7 (98)	88.0 (1,830)	4.1 (86)
教育・子育てに関する団体	1.2 (24)	1.5 (32)	2.9 (60)	87.9 (1,829)	6.5 (135)
趣味の団体	4.3 (90)	14.4 (300)	19.5 (405)	56.8 (1,182)	5.0 (103)
上記以外のボランティア活動団体	2.6 (55)	4.3 (90)	6.7 (139)	81.1 (1,687)	5.2 (109)
その他の種類の団体	3.7 (76)	2.8 (58)	7.9 (164)	81.2 (1,689)	4.5 (93)

・ 数字は%、()内は人数で、n=2,080

図表 3-2 主観的健康感と現在の団体参加状況との関連性

主観的健康感	現在の団体参加の有無	
	参加なし	参加あり
健康ではない	43.3 (168)	56.7 (220)
健康である	28.6 (403)	71.4 (1,004)
合計	31.8 (571)	68.2 (1,224)

・ 数字は%、()内は人数で、n=1,795(無回答を除く)

・ 1%水準で有意差あり

（３）団体活動への今後の参加意向

もっとも参加意欲が高いのは「趣味の団体」である。

現在活動に参加している人の方が、今後積極的に参加していきたいと考える人が多い。

ここまで、住民主体の団体活動に実際のところどのくらいの人に参加しているのか、その現実を確かめてきた。それでは、団体活動への今後の参加意向はどのようなになっているのだろうか。その結果を図表 3-3 に示した。質問文は「今後、積極的に参加したい活動があるとすれば、それはどのようなものですか」というもので、あてはまるものをいくつでも選択できるかたちでたずねている。

今後積極的に参加したい活動としては、「趣味の団体」がもっとも多く、全体の 51.0%の人が今後の参加を希望している。現在、趣味の団体に参加している人の合計が 38.2%であることと比べると、今後参加したいと思っている人の方が多く、この分野の団体活動が今後活性化していく兆しがみられるといえよう。

次いで多かったのは、「ボランティア活動団体」である。しかし、全体の 16.0%の人が今後の積極的な参加を希望しているにとどまっており、前述の「趣味の団体」への参加意向とは大きな開きがある。現在、「ボランティア活動団体」に参加している人の合計が 13.6%であることと比べると、今後参加したいと思っている人の方が若干多くなっている。

続いて多かったのは、「地縁団体」であったが、全体の 10.2%の人が今後の積極的な参加を希望しているにとどまっている。なお、現在、「地縁団体」に参加している人の合計は、45.9%であり、今後「積極的に」参加したいという数字との乖離が大きい。ただし、現在役員をしていたり（7.9%）、積極的に参加している（4.9%）人の合計は 12.8%であり、若干の減少にとどまるという見方もある。

他方、選択肢にあげた団体活動の「どれにも参加したくない」という人は全体の 26.0%に上っている。

図表 3-3 今後積極的に参加したい団体活動

	今後積極的に参加したいと回答した人の割合(人数)	
地縁団体	10.2	(212)
老人クラブ	8.6	(179)
教育・子育てに関する団体	3.6	(74)
趣味の団体	51.0	(1,061)
上記以外のボランティア活動団体	16.0	(332)
その他の種類の団体	5.6	(116)
上記の どれにも参加したくない	26.0	(540)

・ 数字は%、()内は人数で、n=2,080

・ 複数選択回答

それでは、現在の参加者は、今後も同分野の活動に積極的に関わっていきたいと考えているのだろうか。また、現在は参加していなくても、今後は関わっていきたいという人はどのくらいいるのだろうか。この点について、今後の積極的な参加意向が他の団体に比べて相対的に高かった「趣味の団体」、「ボランティア活動団体」、「地縁団体」に絞ってみていこう。

「趣味の団体」、「ボランティア活動団体」、「地縁団体」それぞれへの現在の参加の有無と今後の参加意向との関連は**図表 3-4**のとおりである。「趣味の団体」に現在参加している人のうち 77.6%の人は、今後も積極的に参加していく意向を示している。現在参加していない人の場合、38.9%の人が今後は積極的に参加したいと考えている。現在活動に参加している人の方が、今後積極的に参加していきたいという人が多くなっていることがわかる。年齢層別に少し細かくみると、現在参加している人も参加していない人も、年齢層が高いほど今後の参加意向は低くなる傾向がみられる。しかし、現在活動に参加している人と参加していない人とでは、年齢層に伴う参加意向の減少割合は異なっている。現在参加している人たちが、参加していない人たちに比べて、年齢層による参加意向の減少割合が明らかに低くなっているのである。

「ボランティア活動団体」に現在参加している人のうち 43.0%の人は、今後も積極的に参加していく意向を示している。現在参加していない人の場合、12.7%の人が今後は積極的に参加したいと考えている。現在活動に参加している人の方が、今後積極的に参加していきたいという人が多くなっていることがわかる。年齢層別にみると、現在参加している人も参加していない人も、年齢層が高いほど、今後の参加意向は低くなる傾向がみられるが、現在参加している人に限れば、65-74 歳の今後の参加意向は 50-64 歳の今後の参加意向を若干上回っている。また、「趣味の団体」の場合と同様に、現在参加している人たちが、参加していない人たちに比べて、年齢層による参加意向の減少割合が明らかに低くなっている。

地縁団体に現在参加している人のうち 17.4%の人は、今後も積極的に参加していく意向を示している。現在参加していない人の場合、4.9%の人が今後は積極的に参加したいと考えている。現在活動に参加している人の方が、今後積極的に参加していきたいという人が多くなっていることがわかる。年齢層別にみると、現在参加している人の場合、75-84 歳の人の今後の参加意向がもっとも高くなっており、次いで 50-64 歳、65-74 歳と参加意向が低くなっている。現在参加していない人の場合は、年齢層が高いほど、今後の参加意向が低くなる傾向がみられる。しかし上記 2 つの団体とは異なり、年齢層によって参加意向が明らかに減少しているわけではない。

図表 3-4 現在の参加状況と今後の積極的参加意向との関連性

現在の参加の有無		今後の参加意向がある人の割合(人数)					
		趣味の団体		ボランティア活動団体		地縁団体	
全体	参加している	77.6	(601)	43.0	(119)	17.4	(161)
	参加していない	38.9	(431)	12.7	(204)	4.9	(43)
		**		**		-	
参加している	50-64歳	80.1	(265)	44.3	(47)	17.0	(79)
	65-74歳	77.4	(236)	46.0	(58)	15.8	(49)
	75-84歳	72.1	(98)	32.6	(14)	21.7	(31)
	合計	77.6	(599)	43.3	(119)	17.3	(159)
		-		-		-	
参加していない	50-64歳	48.7	(290)	18.1	(149)	5.7	(24)
	65-74歳	33.5	(108)	9.2	(46)	4.4	(13)
	75-84歳	16.5	(30)	3.3	(9)	3.8	(6)
	合計	38.9	(428)	12.8	(204)	4.9	(43)
		**		**		-	

・ 数字は%、()内は人数で、無回答は除く

・ **1%水準で有意差あり。*5%水準で有意差あり。-は有意差なし

以上をまとめると、まず、中高年世代が今後積極的に参加していきたいと考えているのは、「趣味の団体」である。一般的にみて期待の大きい「ボランティア活動団体」、町会・自治会等の「地縁団体」への参加意向は、必ずしも高いとは言い難い状況にある。しかし、「趣味の団体」、「ボランティア活動団体」、「地縁団体」のそれぞれの活動に現在参加している人は、現在参加していない人に比べて、今後も同分野の活動に積極的に関わっていききたいと考えている。年齢層別にみても、現在活動している人の場合は、年齢層による参加意向の減少割合が少なくなっている。このことは、現在活動に参加していることが、年齢に大きく左右されずに、活動の継続性への動機と意欲を支えていることを裏付けているのではないだろうか。また、現在活動に参加していない人であっても、今後は参加したいと考えている人も存在している。とくに、現在趣味の団体に参加していない人の今後の参加意向は約40%に達しており、継続活動者が多いことと併せ、今後の活動の広がりが期待できる団体活動であるといえよう。

3. 近所づきあいと地域生活

(1) あいさつ・立ち話・おすそわけ

日常的な近所づきあいは活発に行われている。

第3章の2節でとりあげたように、八王子市内においても町会・自治会やNPOが中心となって、団体の役員のみならず、多くの参加者を巻き込みながら、高齢社会に対応したさまざまな取り組みが実施されている。しかし、中高年世代の全体的な傾向をみる限り、趣味の団体活動の興隆を期待することはできそうであっても、「地縁団体」や「ボランティア活動団体」への積極的な参加が急激に高まっていくとは予想できない。中高年個人の団体活動への参加が全体的にみて低調であることを踏まえ、次に、地域や社会との接点の基盤である日常の個人的・家族的つきあいの現状を確かめておこう。

中高年世代の日常的な近所づきあいの現状について、つきあいの内容別に「あいさつをする」、「立ち話をする」、「おすそわけをする」の3つの行動についてたずねた結果が**図表 3-5**である。あいさつは95.0%の中高年が行っており、立ち話をしているのは72.7%、おすそわけをしているのは56.5%である。団体活動への参加状況に比べれば、日常的な近所づきあいは活発に行われているとみてよいだろう。

図表 3-5 近所づきあいの現状

近所づきあいの内容	はい	いいえ	無回答
あいさつをする	95.0 (1,977)	1.7 (36)	3.2 (67)
立ち話をする	72.7 (1,513)	24.9 (517)	2.4 (50)
おすそわけをする	56.5 (1,175)	41.1 (855)	2.4 (50)

・ 数字は%、()内は人数で、n=2,080

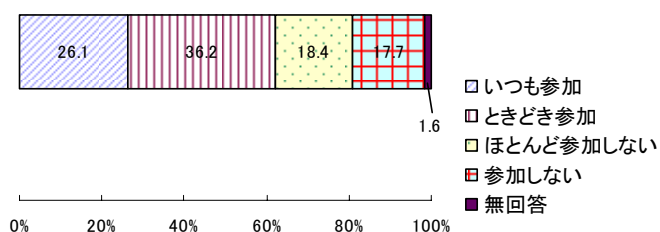
(2) 地域行事への参加

近所づきあいや地域行事への参加は、団体活動に比べれば活発な傾向を示している。

住まい周辺の地域行事（一斉清掃や祭りなど）への参加の状況を**図表 3-6**に示した。「ときどき参加する」と回答した人が全体の36.2%を占めてもっとも多く、次に「いつも参加する」が26.1%で続いている。他方、「ほとんど参加しない」が18.4%、「参加しない」が17.7%となっている。全体的にみて参加傾向をもつ人の方が多くなっていることがわかる。

ここで、近所づきあいと地域行事への参加の現状をまとめておこう。近所との日常的なつきあいは、立ち話をしている人が約 73%に上るなど一定程度顔見知りの関係が形成されているとみることができる。他方、地域行事への参加傾向をもつ人は全体の約 62%で、不参加傾向の人よりは多くなっている。地域や社会との具体的な接点として、前節でみた団体活動に比べれば、近所づきあいや地域行事への参加は活発な傾向を示しているといえる。

図表 3-6 地域行事への参加 (n=2,080)



(3) 望ましいと考える近所づきあいと地域生活

意識面において、近所や地域に対して自らの関わりを主体的に認知している人が多い。

ここまで、地域や社会との接点としての中高年の具体的な行動面に着目し、近所づきあい、地域行事への参加状況をみてきたが、次に、意識面に着目してみよう。

中高年世代が望ましいと考えている近所づきあいのあり方はどのようなになっているだろうか(図表 3-7)。「同じ地域に住むものとして近所づきあいをするのは当然」とする近所づきあいに対する積極的な意識をもつ人は、65.9%でもっとも多い。一定の意義をみとめて近所づきあいを肯定している「普段の生活で困ったとき、つきあいがないと不便」は 16.1%となっている。他方、「近所づきあいがなくとも困らないので、必要はない」とする近所づきあいに対して意義をみとめていない人は 8.0%、「近所づきあいはわずらわしいことが多いので、したくない」とする近所づきあいに対して否定的な考え方をもち人は 6.4%となっている。

図表 3-7 近所づきあいに対する考え方

近所づきあいをするのは当然	65.9	(1,370)
つきあいがないと不便	16.1	(335)
つきあいがなくとも困らない	8.0	(167)
わずらわしいのでしたくない	6.4	(134)
無回答	3.6	(74)

・ 数字は%、()内は人数で、n=2,080

次に、地域生活に対する考え方をみてみよう(図表 3-8)。「この地域には地域なりの生活やしきたりがある以上、できるだけこれにしたがって、人々との和を大切にしたい」という地元中心の共同体意識の強い人が 47.1%でもっとも多い。次いで、「地域社会は自分の生活上のひとつのよりどころであるから、住民がお互いに進んで協力し、住みよくするよう心がける」という地域社会に対して能動的意識をもつ人が 34.6%となっている。これらの2項目は、地域社会づくりにおいて自らが主体であるという考え方を表している(注5)。他方、「この地域に生活することになった以上、自分の生活上の不満や要求をできるだけ市政・その他に反映していくのは、市民としての権利である」という個我的な権利意識の強い人は 7.4%、「この地域にた

またま生活しているが、さして関心や愛着といったものはない。地元の熱心な人たちが、地域をよくしてくれるだろう」という地域に無関心な層は7.1%となっている。これらの2項目は、地域社会づくりにおいて自らは客体であるという考え方が、前出の2項目に比べて強いことを表している（注6）。

以上をまとめると、八王子市の中高年世代では、近所づきあいの価値を積極的に認めている人や近所づきあいに一定の意義をみとめている人を合計すると82%に上っていること、地域社会づくりにおいて自らがその主体であるという意識をもつ人も約82%に上っていることがわかる。意識面において、近所や地域に対して自らの関わりを主体的に認知している人が多いといえるだろう。

図表 3-8 地域生活に対する考え方

人々との和を大切にしたい	47.1	(980)
お互い進んで協力し住みよくするよう心がける	34.6	(719)
不満や要求を反映していくのは市民の権利	7.4	(154)
関心や愛着はない	7.1	(148)
無回答	3.8	(79)

・ 数字は%、()内は人数で、n=2,080

4. 高齢期における地域や社会への貢献意欲を高めているものは何か

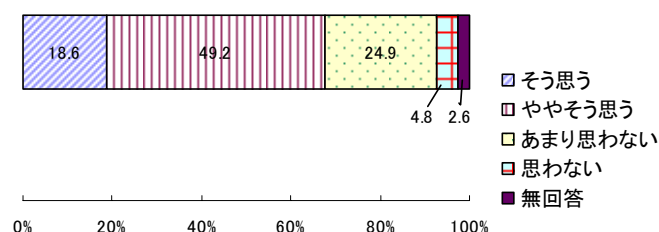
高齢期における地域や社会への貢献意欲が高いのは、女性よりも男性であり、地域行事に参加している人、ボランティア団体・趣味の団体に参加している人、団体活動の役員をしている人、親しい友人や隣人が多い人である。

最後に、高齢期の過ごし方として「地域や社会に尽くしたい」と考えている人がどのくらいいるのか、このような貢献意欲をもっているのは、現在、地域社会とどのような接点をもっている人たちなのかを検討することによって、貢献意欲を高めるためにどのような側面が重要なのかに関する示唆を導き出すことにしたい。

まず、高齢期における地域や社会への貢献意欲について、その結果を図表 3-9 に示した。地域や社会に尽くしたいと「やや思う」と回答している人は全体の49.2%、「そう思う」は18.6%となっており、貢献意欲が高い傾向を示す人（「やや思う」と「そう思う」の合計）は67.8%である。その一方で、「あまり思わない」は24.9%、「思わない」は4.8%となっている。

次に、地域や社会への貢献意欲の高低に影響を与えている行動を明らかにしていこう。現在、具体的行動を通して、地域や社会とどのような接点をもっている人が高齢期における地域や社会への貢献意欲が高いのだろうか。

図表 3-9 高齢期における地域や社会への貢献意欲 (n=2,080)



説明したい現象である地域や社会への貢献意欲を従属変数とし、貢献意欲の高低に影響を与えている独立変数を、「地縁団体」、「ボランティア活動団体」、「趣味の団体」への参加の有無、何らかの団体活動における役員担当の有無、近所づきあいの程度、地域行事への参加の程度、親しい近所の人の人数、親しい友人の人数、年齢層、性別として重回帰分析を行った結果が図表 3-10 である（注 7）。

このような中高年自身の基本属性と行動の中では、女性よりも男性の方が貢献意欲が高く、「趣味の団体」に参加している人、「ボランティア活動団体」に参加している人、何らかの団体活動において役員を担当している人、地域行事に参加している人、頼りにし親しくしている友人が多い人、頼りにし親しくしている近所の人が多い人、このような行動特性を現在もっている人は、高齢期における地域や社会への貢献意欲が高くなっている。中でも、地域や社会への貢献意欲と相対的にもっとも関連が強いのは、地域行事に参加しているという具体的な行動の実績であり、次に関連が強いのは「ボランティア活動団体」への参加であった。なお、年齢層、「地縁団体」への参加の有無、近所づきあいの程度は、高齢期における地域や社会への貢献意欲に直接的な影響を及ぼしていないことが明らかになった。

以上より、高齢期における地域や社会への貢献意欲を高めている要因として、地域行事への参加やボランティア活動など、現時点における地域や社会との接点における具体的な行動やその行動に伴っている意識・感情が考えられることがわかった。また、一般的に期待が集まっている現在の年齢層が高い人の地域や社会への貢献意欲が、即戦力として期待されているほどには特別に高いわけではないこと、あいさつなど緩やかなつきあいや「地縁団体」への参加それ自体によっては、直接的に高齢期における地域や社会への貢献意欲は高まっていないことを指摘することができる。

図表 3-10 地域や社会への貢献意欲（重回帰分析結果）

変数	地域や社会への貢献意欲	
	r	β
年齢層3区分(高年齢層)	.049 *	.014 -
性別(女性)	-.052 *	-.087 **
現在の団体参加:地縁団体(有)	.187 **	-.016 -
現在の団体参加:趣味の団体(有)	.203 **	.055 *
現在の団体参加:ボランティア活動団体(有)	.305 **	.178 **
現在団体役員をしているか(有)	.219 **	.058 *
近所づきあいの程度(高い)	.208 **	.040 -
地域行事への参加の程度(いつも参加)	.333 **	.205 **
近隣規模(5人以上)	.287 **	.090 **
友人規模(5人以上)	.250 **	.112 **
R(重相関係数)		.459 **
n(ケース数)		1685

・ rは相関係数、 β は標準偏回帰係数で、それぞれ平均0、分散1の値をとる

・ ** 1%水準で有意差あり。* 5%水準で有意差あり。-は有意差なし

5. 小括

高齢期における地域や社会への貢献意欲を高めているのは、現時点における地域や社会との接点における具体的な行動とその行動に伴う意識・感情であり、「今」から自主的・継続的に関わっていきやすい仕組みづくりがはじめの一歩になるのではないか。

本章の目的は、地域や社会への貢献活動の担い手として期待されている中高年世代の団体活動や近所づきあいなどの地域社会との接点の現状を明らかにし、どのような接点が高齢期における貢献意欲を支えているのか、その源泉を探ることであった。ここまでの分析と考察をまとめておこう。

団体活動への参加と今後の参加意欲からみてきたのは、団体活動は日常的な近所づきあいに比べれば低調であることである。高齢社会における地域社会の担い手として一般的に期待が高いと思われる「地縁団体」や「ボランティア活動団体」への今後の参加意欲は必ずしも高くなく、もっとも参加意欲が高かったのは「趣味の団体」であった。また、現在、団体に参加している人の今後の参加意欲は年齢層によってほとんど減少しないが、現在活動していない人のうち今後に参加意欲を示す人は高齢層になるほど少なくなる、ということであった。

近所づきあいという地域社会との緩やかなつきあい関係は、実際の行動面において、立ち話をする人が約73%に達していることから一定程度形成されており、意識の面でも近所づきあいの価値が82%から肯定される傾向がみられる。また、地域行事への参加という実際の行動面では、約62%の人が参加傾向を示しており、意識の面では、地域社会づくりに対して約82%の人が主体的意識をもっている。これらのことから、全体的にみれば、緩やかなつきあいに関しては、行動と意識との整合性がある程度とれているが、地域への参加に関しては、緩やかなつきあいに比べて、行動と意識との差がみてとれる。

また、高齢期における地域や社会への貢献意欲が高いのは、女性よりも男性であること、地域行事に参加している人、ボランティア活動団体に参加している人、親しい友人や近所の人が多い人、何らかの団体で役員をしている人、趣味の団体に参加している人であることがわかった。反面、一般的に期待が集まっている、年齢層が高い人の貢献意欲が特別に高いわけではなく、あいさつなど緩やかなつきあいや「地縁団体」への参加それ自体には、直接的に貢献意欲を高める効果はみられなかった。

今回の調査結果は、現時点の地域や社会との接点における具体的な行動や、その行動に伴っている意識・感情が、高齢期における地域や社会への貢献意欲を高めている可能性を示唆している。「高齢期を迎えてから」でも地域や社会に関わっていきやすい社会的条件を整えていくことと同時に、「今」から具体的な行動として自主的・継続的に関わっていきやすい団体活動や地域行事の仕組みづくりが、高齢社会を支える地域社会づくりに結びつく共通感情や共通体験を生み出すはじめの一歩になると期待される。

● おわりに

日本では全人口における65歳以上の割合が22%を超え、八王子市においても5人に1人が65歳以上となり、社会全体の高齢化が進行している。こうした現状を踏まえ、本稿では今後の高齢社会において、生きがい、幸せ、地域とのつながりを充実させていくうえで重要となる条件や課題を導き出すことを試みてきた。最後に、以上の調査結果から明らかになったことを確認しつつ、今後の八王子市に求められている高齢社会への取り組みについて、若干の問題提起をして結びとする。

第1章では、生きがい意識を高めることによって、健康であること、働いていること、経済的に安定していること、1人暮らしでないことといった条件に加え、自らが他者に対するサポ

ートの提供主体足りえること、団体活動に参加していること、親しい友人がいることといった他者と築き上げているつながりが重要な役割を果たしていることを明らかにした。個人を社会に結び付けている接点としての役割意識の形成にとって、他者との具体的な関係性の構築は欠かせないものであり、この他者とのつながりが中高年世代が生きがいをもって生活することに密接に結びついていると考えることができる。

第2章では、生きる喜びや楽しみの対象は、社会参加、他者との交流、家庭生活、趣味・余暇活動、思想・信条といった生きがい特性に分類できること、生きがい意識を高めることによって、もっとも重要な生きがい特性は性別や年齢層によって異なっていること、暮らしの中のさまざまな場面に生きがいを感じるバランスのとれたライフスタイルは生きがい意識を高めていることを明らかにした。また、生きがい意識を高めることが、中高年世代における幸せ感を高める作用をもっており、とくに、現在における自己の役割意識の形成が、将来に対する明るい展望に結びついていることがわかった。現代社会において、性別や年齢層が社会の分化の準拠点になっている側面があることを踏まえれば、肯定的自己を維持する役割や居場所の獲得には、自らが喜び・楽しみを感じる対象そのものを見つけ出していく主体的な働きかけが必要であるにとどまらず、社会や他者から与えられる是認といった社会的・制度的条件が必要とされていることが示唆されている。

第3章では、高齢社会においては地域社会や地縁団体が果たす役割への期待や支援の担い手としての高齢者層への期待が集まっており、八王子市内においてもさまざまな団体が各自の得意分野を活かしつつ、連携して地域の共通課題に取り組む萌芽がみられるが、全般的にみて団体活動への参加や今後の参加意向は趣味の団体を除いて活発とはいいがたいこと、活動継続への動機付けは現在の活動実績の中に見出されると考えられること、近所や地域との日常的なつきあいは一定程度形成され、日常的なつきあいの価値についても肯定的な意見が多くなっていることを明らかにした。また、高齢期における地域や社会への貢献意欲を高めているのは、地域行事や自発的団体活動に参加すること、親しい友人や親しい近所の人がいるといった、現在時点における地域や社会との接点における具体的な行動やその行動に伴っている意識・感情であることがわかった。「高齢期を迎えてから」ではなく、「今」から具体的・継続的に関わっていきやすい団体活動や地域行事の仕組みづくりが、高齢社会を支える地域社会づくりに結びつく、地域で共同で取り組むべき課題に対する認識を醸成する基盤になりうることを示されていると考えられる。

より豊かな高齢社会の実現に向けて、今から市民と行政双方にできることは何か。本アンケート調査結果は、中高年世代が個人としてどのような条件を抱えていても、他者とのつながりを形成・維持できるような重層的な制度設計や取り組みが、行政の各部門はもとより、各種団体を含め民間部門にも求められていること、私たち一人ひとりの地道な取り組みと工夫の過程の中にしか課題解決に向けた道筋は見えてこないこと、このことを改めて浮かび上がらせたように思われる。

はじめに 注

- 1) 報告書は八王子市都市政策研究所のホームページからダウンロードできる。
- 2) その際、統計的検定を行っている。統計的検定とは、母集団から無作為抽出した標本から得られた数値に基づいて、母集団の特性値が一定の確率で存在すると想定される範囲を推測する手法である。「誤差の範囲を超えて差異がある」と判断してよい数値については、第1章以下で示す統計分析結果の図表ではアスタリスク(*)を用いて表現した。なお、本稿で用いた推定の範囲は、95%以上(5%水準で有意差あり*)、99%以上(1%水準で有意差あり**)の2つの水準である。

第1章 注

- 1) 主観的幸福感の測定指標の変遷については古谷野ほか(1989)が詳しい。
- 2) 生きがいの概念については、神谷(1980)、高橋勇悦・和田修一編著(2001)を参照した。
- 3) 2つの質問項目それぞれにつき、「思わない」1点～「そう思う」4点の得点を与え、2項目に対する回答を加算し、後の分析のために度数分布ができるだけ偏らないように4つに再区分した。具体的には、合計得点が2～5点の場合、生きがい意識が「低い」として新たに1点と区分し直し、6点を「やや低い」2点、7点を「やや高い」3点、8点を「高い」4点とし、間隔尺度として生きがい意識を表す得点とみなすこととした。

なお、「人から頼り」と「活躍の場」の2つの変数が、回答者に直接質問していないもの(観測できない変数)である「生きがい意識」を測定しているといつてよいかを検討するために、質問項目間の内的一貫性に関する尺度であるクロンバックの α 係数を算出したところ、 $\alpha = .801$ と十分な内的一貫性がみられたため、新しい尺度を採用した。なお、 α は0(内的一貫性なし)から1(完全な内的一貫性)までの値をとる。
- 4) 加齢による影響だけを取り出して明らかにするためには、同じコーホートを追跡調査する長期的視点が必要である。
- 5) 多数の研究があるが、例えば、直井(2001)、前田(2006)をあげることができる。
- 6) 度数分布の偏りを調整するために、次のように再カテゴリー化している。外出頻度については、「週1回以下」を「低頻度」、「週2～3回」を「やや低頻度」、「週4～5回」を「やや高頻度」、「ほぼ毎日」を「高頻度」と再カテゴリーした。通院頻度については、「週1回以上」を「高頻度」、「月1～2回くらい」を「中頻度」、「年に数回・ほとんど行かなかった」を「低頻度」と再カテゴリーした。
- 7) 例えば、外出行動の効果については直井(2001)、外出しやすい住環境の効果については前田(2006)がある。
- 8) 直井(1990)を参照した。なお、同居既婚者がいる人の生活満足度が他の人に比べて高いことを報告した古谷野ら(1995)の研究もある。
- 9) 多数の研究が、親族や友人などとの交際頻度や親しい友人数や隣人数が多い人の主観的幸福感や生活満足度が高いという結果を報告しており、パーソナル・ネットワークが高齢者の生活の質を高める効果を指摘している。例えば、直井(2001)、前田(2006)など。しかし、パーソナル・ネットワークの測定方法はさまざまである。また、パーソナル・ネットワークの大きさや距離に着目した原田ら(2003)は、戸建て持家層の近距離友人数が多いことを報告しており、住環境が人間関係に及ぼす影響は検討の余地がある。
- 10) 松本(2006)は、名古屋都市圏の住民を対象とした調査の結果、都市的地域においては、男性の近隣関係は女性に比べて衰退していること、女性の近隣関係は実質的なサポート関係を伴うことを報告している。
- 11) 野辺(1999)は、趣味・スポーツの会や宗教集団など自主加入型集団への参加が主観的幸福感を高めると報告している。また金子(1987)は、地域コミュニティとのつながりと高齢者の生きがい指標は高い相関を示すと報告している。

- 12) ソーシャル・ネットワークとソーシャル・サポートの概念については野口（1991）を参照した。
- 13) 受領サポートのうち「悩み」サポート、「気晴らし」サポート及び「声かけ」サポートの3項目間の信頼性係数 α は.897、「用事」サポートと「世話」サポートの2項目間は α =.804であり、それぞれ十分な内的一貫性を有していたため、前者と情緒的サポート、後者を手段的サポートとした。提供サポートのうち「悩み」サポートと「声かけ」サポートの2項目間は α =.886、「用事」サポートと「世話」サポートの2項目間は α =.868であり、それぞれ十分な内的一貫性を有していたため、前者を情緒的サポート、後者を手段的サポートとした。
- 14) 「いる」に1点、「いない」に0点を与えて加算し、度数分布の偏りをできるだけ抑えて4件尺度に再カテゴリー化した。具体的には次のとおり。「他者に期待する情緒的支援」については、0～4点を「少ない」、5～7点を「やや少ない」、8～10点を「やや多い」、11点以上を「多い」とした。「他者に期待する手段的支援」については、0～1点を「少ない」、2点を「やや少ない」、3～4点を「やや多い」、5点以上を「多い」とした。「他者に提供できる情緒的支援」は、0～2点を「少ない」、3～4点を「やや少ない」、5～7点を「やや多い」、8点以上を「多い」とした。「他者に提供できる手段的支援」については、0～1点を「少ない」、2～3点を「やや少ない」、3～4点を「やや多い」、5点以上を「多い」とした。
- 15) サポートの効果については、古谷野（1991）、妹尾ら（2003）を参照した。日下ら（1998）は、サポートを提供することに対する満足度が高いほど、心理的変数としての自尊感情が高まることを報告している。しかし、ソーシャル・サポートの測定方法はさまざまで一貫した知見が得られるには至っていない。
- 16) 重回帰分析では、説明したい現象である従属変数に対して、現象の原因と考えられる複数の独立変数がどのような影響を与えているのかを検討し、それらの独立変数群が説明したい現象に対してもつ相対的な重要性を明らかにすることができる。例えば、生きがい意識にとって重要なのは親しい親族数か、それとも親しい友人数か。
- 17) なお、各重回帰分析とも、独立変数間に分析を歪めるほどの完全に近い高い相関がある状態（多重共線性）がないことを確認している。

第2章 注

- 1) ここに示した因子負荷量の読み方は、因子分析結果をより読み取りやすくするためにかけた直交回転（ここではバリマックス法を用いた。）後の因子負荷量についてのものである。
- 2) 研究対象である個々人が、その因子の特性をどのくらい備えているかを表す変数を因子得点という。因子得点は抽出された因子の数分、各個人の得点が算出され、平均値は0、標準偏差は1である。後の分析で、生きがい意識得点を説明する独立変数として各因子得点を使用する。
- 3) 各因子につき、生きがい対象の項目間の内的一貫性を確認したところ、 α は最小で0.622を示していたので許容範囲と捉えた。
- 4) 各因子につき、生きがい対象の項目間の内的一貫性を確認したところ、 α は最小で0.674を示していたので許容範囲と捉えた。
- 5) これに関連する既存研究としては、ボランティア活動に対する考え方を社会的貢献、余暇活動、自己実現の3つに分けて捉えた場合、ボランティア活動が社会的貢献や自己実現につながると考えている人ほど、心理的変数としての自尊感情が高まるとの報告がある（日下ら（1998））。
- 6) 他者と知り合ってからその関係の継続や発展を検討し、社会関係の形成に關係の重複が寄与している可能性を指摘した矢部ら（2002）によれば、趣味の活動や飲食店等の常連であることは、社会関係の発達の契機としてよりも、關係の継続の契機としての役割を果たしている。

第3章 注

- 1) 基礎自治体の新しい地平がローカル・ガバナンスの再構築にあることについて考察した文献として、羽貝編著（2007）を参照。
- 2) 「ふれあい・いきいきサロン」活動とは、高齢者どうし、または世代を超えた仲間づくりの場を提供し、地域社会における健康でいきいきとした生活の実現を図ることを目的に、地域でサロン活動を自主的に運営する非営利の民間団体が実施しているものである。市は、「八王子市ふれあい・いきいきサロン支援事業実施要綱」（2008年施行）に基づいて、八王子市社会福祉協議会に委託し、その活動を運営面の相談や支援金の交付によって支援している。現在、市が支援する団体数は75団体であり、月1～2回程度の開催が主流である（2010年度実績）。
- 3) 広井（2009）は、全国を対象とした「地域コミュニティ政策に関する自治体アンケート調査」結果から、町会・自治会を「地域コミュニティ単位」として実質的に特に重要なものと回答した基礎自治体が群を抜いて多く、次が小学校区であったと報告している。
- 4) 八王子市内における2010年6月1日現在の町会・自治会等世帯加入率の平均は約64%であり、市役所の旧事務所管内別にみると、加入率の低いところで約41%、高いところで約75%となっている（協働推進課資料より）。
- 5) 磯村ら（1971）が学際的研究グループにより1970年1月に実施した「八王子市民の生活と意識調査」の質問項目に若干の言葉の修正を加え、本調査に組み込んだ質問項目である。その中で奥田（1971）は、地域社会（コミュニティ）を分析する視角として、住民の地域社会に対する行動として、主体化—客体化という軸と、地域社会に対する意識・価値における普遍化（開放的）—特殊化（閉鎖的）という2軸を提案し、この組み合わせで地域社会を4つに分類している。「この地域には地域なりの生活やしきたりがある以上、できるだけこれにしたがって、人々との和を大切にしたい」という質問項目は、主体的・閉鎖的にあたる類型で「地域共同体」モデルと名付けられている。「地域社会は自分の生活上のひとつのよりどころであるから、住民がお互いに進んで協力し、住みよくするよう心がける」は、主体的・開放的にあたる類型で「コミュニティ」モデルと名付けられている。
- 6) 上記の奥田（1971）の類型では、「この地域に生活することになった以上、自分の生活上の不満や要求をできるだけ市政・その他に反映していくのは、市民としての権利である」は、客体的・開放的にあたる類型で「個我」モデルと名付けられている。「この地域にたまたま生活しているが、さして関心や愛着といったものはない。地元の熱心な人たちが、地域をよくしてくれるだろう」は、客体的・閉鎖的にあたる類型で「伝統的アノミー」モデルと名付けられている。なお、「アノミー」とは、社会的規範の動揺・弛緩・崩壊などによって生じる欲求や行為の無規制状態のことを指す社会学的概念である。
- 7) 重回帰分析では、「地域や社会に尽くす」に対する回答について度数分布の偏りを調整するために、「思わない」「あまり思わない」を「低い」（1点）、「やや思う」を「中」（2点）、「思う」を「高い」（3点）と再カテゴリー化した。

参考文献

- ・奥田道広「コミュニティ形成の論理と住民意識」『都市形成の論理と住民』磯村英一ほか編著所収、pp. 135-177、東京大学出版会、1971年
- ・金子勇「都市高齢者のネットワーク構造」『社会学評論』vol. 38-3、pp. 336-350、1987年
- ・金子勇『社会調査から見た少子高齢社会』ミネルヴァ書房、2006年
- ・神谷美恵子（1980）『生きがいについて』みすず書房、1980年
- ・古谷野亘・柴田博・芳賀博・須山靖男「生活満足度尺度—主観的幸福感とその測定—」『老年社会科学』vol. 11、pp. 99-115、1989年

- ・古谷野亘「社会的ネットワーク」『老年社会科学』vol. 13、pp. 68-76、1991 年
- ・古谷野亘・岡村清子ほか「都市中高年の主観的幸福感と社会関係に関連する要因」『老年社会科学』vol. 16-2、pp. 115-124、1995 年
- ・妹尾香織・高木修「援助行動経験が援助者自身に与える影響—地域で活動するボランティアにみられる援助効果」『社会心理研究』vol. 18、pp. 106-118、2003 年
- ・高橋勇悦・和田修一編著『生きがいの社会学—高齢社会における幸福とは何か—』弘文堂、2001 年
- ・直井道子「大都市居住高齢者の幸福感」『総合都市研究』第 39 号、東京都立大学都市研究所、1990 年
- ・直井道子『幸福に老いるために—家族と福祉のサポート—』勁草書房、2001 年
- ・野口裕二「高齢者のソーシャルサポート—その概念と測定—」『社会老年学』vol. 34、pp. 37-48、1991 年
- ・野辺政雄「地方都市に住む高齢女性の主観的幸福感」『理論と方法』vol. 14-1、pp. 105-123、1999 年
- ・羽貝正美編著『自治と参加・協働—ローカル・ガバナンスの再構築』学芸出版社、2007 年
- ・原田謙・浅川達人ほか「インナー・シティにおける後期高齢者のパーソナル・ネットワークと社会階層」『老年社会科学』vol. 25-3、pp. 291-301、2003 年
- ・日下菜穂子・篠置昭男「中高年のボランティア活動参加の意義」『老年社会科学』vol. 19-2、pp. 151-159、1998 年
- ・広井良典『コミュニティを問い直す』ちくま新書、2009 年
- ・前田信彦『アクティブ・エイジングの社会学—高齢者・仕事・ネットワーク—』ミネルヴァ書房、2006 年
- ・松本康「都市化とコミュニティの変容」『地域社会学講座 第 1 巻 地域社会学の視座と方法』似田貝香門監修所収、pp. 131-156、東信堂、2006 年
- ・矢部拓也・西村昌紀ほか「都市男性高齢者における社会関係の形成—「知り合ったきっかけ」と「その後の経過」—」『老年社会科学』vol. 24-3、pp. 319-326、2002 年

(にしだ なほこ・ふくだ じゅん・むらかみ かおる)